

高知県安芸市

清 水 寺 岡 遺 跡

SEISUIZIOKA SITE

1990年3月

安芸市教育委員会

清　水　寺　岡　遺　跡

1990年3月

安芸市教育委員会

序

安芸市は早くから県東部の中心地として繁栄し、数多くの文化遺産に恵まれ、特色ある教育文化都市をめざし歩んでまいりました。この郷土の文化遺産を後世に伝えることは現在に生きる私たちの務めであります。

清水寺岡遺跡は、昭和38年に旧石器時代のサヌカイト製石器が採取され、また縄文、弥生時代の遺物が散布する埋蔵文化財包蔵地として知られていたものであります。昭和60年度に市民待望の安芸市立清水ヶ丘体育馆が当地に建設されることとなりました。

これを契機に、工事施工に先だち昭和60年7月23日～8月11日にかけて発掘調査を実施したのでありますが、発掘調査の結果、弥生時代の集落跡を確認、弥生土器、石包丁、砥石、サヌカイト石片など遺物約8,000点が検出され、本県における弥生時代文化解明のための貴重な資料を得るなど大きな成果をみることができました。

安芸市教育委員会では、発掘調査結果を記録保存するとともに、出土品は一部を歴史民俗資料館において展示、永久に継承し考古学術上の資料として広く活用していくことを考えております。

終わりに、本調査にあたって御指導、御協力いただきました高知県文化振興課の皆様方を始め土佐史談会、関係各位に厚くお礼を申し上げ、発刊のごあいさつをいたします。

平成2年3月31日

安芸市教育委員会

教育長 中川一郎

例　　言

1. 本書は、安芸市教育委員会が市立清水ヶ丘体育馆建設に伴って実施した、清水寺岡遺跡（弥生時代集落跡）発掘調査の概要報告書である。

2. 調査は、安芸市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の協力を得て実施した。発掘調査は、高知県教育委員会文化振興課主幹山本哲也が担当し、調査事務は安芸市教育委員会社会教育課が行った（担当 川島義久、有沢俊明）。
調査内容は以下のとおりである。

調査地 安芸市川北字清水寺岡（清水ヶ丘中学校南）

調査期間 現地調査 昭和60年7月23日～8月11日

整理作業 昭和60・61・平成元年度

調査面積 720m²

3. 本書で使用した図面のうち、Fig1 及びFig2 は、国土地理院発行5万分の1(NI-53-28-3.4)を、Fig 3 は同院発行2万5千分の1を複製使用したものである。

4. 本書の編集は安芸市教育委員会が行い、執筆は山本哲也が担当した。

5. 発掘調査には、清水ヶ丘中学校をはじめ地元関係各位の絶大な御援助、御協力をいただいた。厚く御礼申しあげたい。また、現地調査及び遺物整理等には以下の諸氏の御協力をいただいた。記してお礼申しあげたい。

（中島恒次郎、山本岩世、西村雅子、浜田香代、吉本睦子、大原喜子、島村加奈）

本文目次

I 調査に至る経緯と調査経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の概要	5
IV 検出遺構と出土遺物	7
検出遺構	7
S T 1	7
S T 2	8
S T 3	9
S T 4	9
S T 5	9
S T 6・その他の遺構	13
出土遺物	15
土 器	15
石 器	16
V まとめ	17

挿図目次

- Fig 1 遺跡の位置
- Fig 2 周辺の遺跡
- Fig 3 調査地点位置図
- Fig 4 S T 1 出土遺物
- Fig 5 S T 2 出土遺物
- Fig 6 S T 3 出土遺物
- Fig 7 S T 4 出土遺物
- Fig 8 S T 5 出土遺物
- Fig 9 S T 6 出土遺物
- Fig 10 S K 1・2・3 平面図・土層断面図

図面目次

- | | |
|-----------------------|---------------------------------------|
| 図1 遺構全体図 | 図8 S T 5・6、S D 1、S K 1 出土遺物
(弥生土器) |
| 図2 S T 1・S T 2 | 図9 S K 3、包含層等出土遺物
(弥生土器) |
| 図3 S T 3・S T 4 | 図10 出土遺物(石器) |
| 図4 S T 5・S T 6 | 図11 出土遺物(石器) |
| 図5 S T 1・2 出土遺物(弥生土器) | 図12 出土遺物(石器) |
| 図6 S T 3 出土遺物(弥生土器) | |
| 図7 S T 3・4 出土遺物(弥生土器) | |

図版目次

- | | |
|--|--|
| PL1 調査地近景(西から)
同上(東から) | PL10 S T 2(北西から)
S T 2・S T 3(南西から) |
| PL2 試掘トレンチ(北東から)
同上(南から) | PL11 S T 3・S T 4 検出状態(東から)
S T 3 検出状態(東から) |
| PL3 遺構検出状態(東から)
同上(北東から) | PL12 S T 3 遺物出土状態(東から)
同上(サスカイト片集中部分・住居址
北東部) |
| PL4 S T 1・S K 1 検出状態(北西から)
同上(西から) | PL13 S T 3・4(左S T 4・右S T 3・西
から)
同上(左S T 3・右S T 4・東から) |
| PL5 遺構検出状態(南西から)
S T 3 検出状態(西から) | PL14 (S T 1・S T 2・S T 3・北西から)
(S T 1・S T 2・S T 3・S T 4・
西から) |
| PL6 S T 1 検出状態(北から)
S T 3(奥)・S T 6・S T 5(手前)
検出状態(東から) | PL15 調査区近景(北から)
同上(北東から) |
| PL7 調査区近景(南から)
S T 1・S T 2周辺(東から) | PL16 出土遺物(弥生土器・S T 1~3) |
| PL8 S T 1 遺物出土状態(南から)
S K 1 遺物出土状態(石鏃・弥生土器
・西から) | PL17 出土遺物(弥生土器・S T 4~6・S
K 1~3) |
| PL9 S K 1(南から)
S K 3(南から) | PL18 出土遺物(石器・S T 1~6・S K 1) |

I 調査に至る経緯と調査経過

安芸市川北字清水寺岡の清水ヶ丘中学校敷地内からは、昭和40年頃、校地造成後にサヌカイト製の尖頭器1点・翼状剥片2点・弥生土器片等が採集され、これまで「清水寺岡遺跡」(旧石器時代・弥生時代遺物散布地)として知られていた。特に、尖頭器・翼状剥片等が採集されたことは、高知県では数少ない旧石器時代関連遺跡として注目され、同時代の遺物包含層等の確認に期待がもたれていた。また、学校校地周辺からは弥生土器・土師質土器・瓦質土器等が表面採集されることから、集落跡などの遺跡が所在することがうかがわれ、具体的な確認作業が待たれていた。

昭和60年度に、清水ヶ丘中学校のグランド南側に接して、市立清水寺岡体育館が建設されることが計画されたため、安芸市教育委員会では高知県教育委員会と協議の結果、同年7月23日～25日の予定で試掘調査を実施することになった。調査対象地は、同校グランド南側の畠地で、学校敷地内と比べて1.8～2.0m程低い平坦地であり、また遺物等の散布もみられず、対象地の南側は地山露出がみられる墓地等であることなどから当初は耕作土下で地山(蛇紋岩風化土等)に至るものとみられていた。調査は、対象地の西側に8×11mの範囲で発掘区を設定し、重機を使用して表土・耕作土等を除去したところ、耕作土下に黒灰色粘砂土が堆積していることが確認され弥生土器片が出土した。このため、黒灰色粘砂土下の精査を行った結果、地表下約30～40cm下で暗褐色粘質土(弥生時代遺物包含層)が検出され、包含層下の淡黄茶色砂礫土上にピット及び溝が形成されていることが判明した。遺構の検出がみられたことから、発掘区を南北に拡張し(13×11m)、調査を進めたところ竪穴住居跡2棟・溝・土壤・ピット等が新たに検出され、広範囲に遺構が形成されていることが明らかとなった。なお、対象地東側に二ヶ所の発掘区(2×4m)を設定しトレチ調査を行ったが、黒灰色粘砂土及び暗褐色粘質土の堆積はみられず、淡黄茶色砂礫中まで現代のかく乱を強く受けしており遺構等の所在は確認されなかった。

調査対象地の西側から住居跡等が検出されたため、工事計画地についての本発掘調査が必要となり、7月25日から8月11日まで緊急発掘調査を実施した。なお、8月10日には現地説明会を開催し、一般公開を行った。調査の結果、竪穴住居跡6棟・土壤・溝・ピットなどの弥生時代中期後半～後期前半に属する遺構が検出され、集落跡の一画が確認された。また、校地造成時に削平されたとみられていた清水寺岡遺跡が、清水ヶ丘中学校グランド下で地表下約1.8～2.5m下に遺物包含層・遺構等が残存していることが初めて明らかとなった。

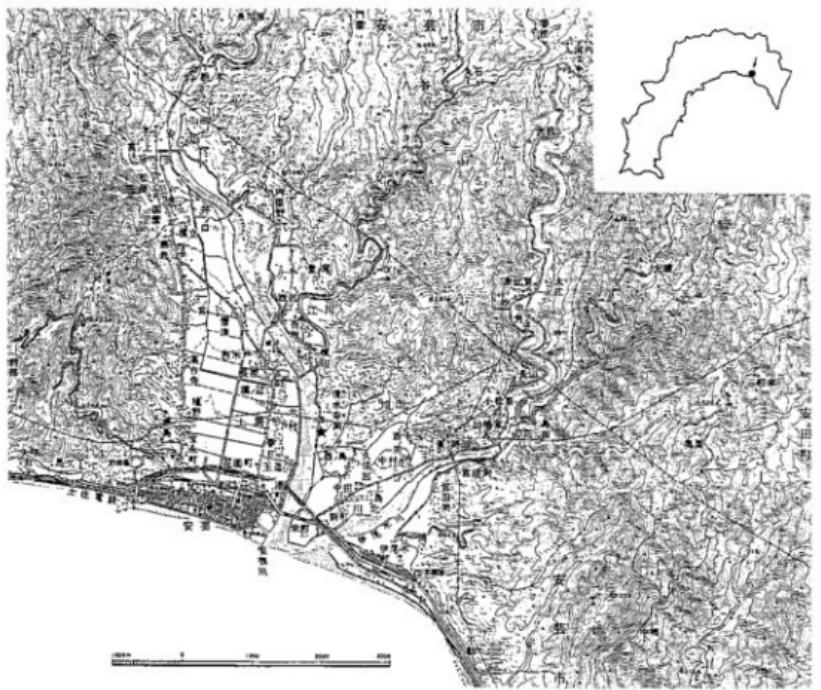


Fig 1 遺跡の位置

II 遺跡の立地と環境

清水寺岡遺跡は、安芸市川北字清水寺岡（安芸市川北甲5685他）に所在する。安芸市は高知県東部の中核市で、総面積318.94km²・人口は約25,000人を数え、安芸川・伊尾木川によって形成された肥沃な沖積平野をもつ。

安芸市街地の東側を蛇行して流れる安芸川は、江川地区周辺で流路を南東方向から南へ変え土佐湾へそそぐ。清水寺岡遺跡は、標高281.8mの山丘から南西方向に延びる丘陵の裾部に位置し、安芸川左岸の河岸段丘上に立地する。

安芸川及び伊尾木川周辺の河岸段丘上・沖積平野部・平野周辺の丘陵裾部には、弥生時代の遺物散布地・集落跡等が点在し、これまで23ヶ所の遺跡の所在が知られている。このなかで、日林坊遺跡からは壺棺が、八坂遺跡から有彫石剣が発見されたのに加え、江川遺跡からは広形銅鋒が、また伊尾木遺跡からは突線紐4式の銅鋒が出土している。安芸市井ノ口字清近岡に所在する清近岡遺跡からは、一の宮団地造成工事に伴う発掘調査によって弥生時代中期後半～後期前半にかけての土壙墓群・濠の一部等が検出され、高知県東部における弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式併行）の集団墓の様相が明らかになっている。

安芸平野は、東西を四国山脈から派生した丘陵によって狹まれた沖積平野で、東西約2km南北約5.2kmの広がりを有する。沖積平野等に立地するこれらの弥生時代遺跡は、消長をもちながらも比較的まとまりのあった遺跡群であったと考えられ、相互に関連しながら弥生時代の地域社会を構成していたものと推察される。また、江川遺跡及び伊尾木遺跡は、弥生時代青銅器出土地としては高知県の東限に該当し、県下の弥生時代遺跡群の動向を探るうえで、安芸平野周辺の遺跡群は注目されているところである。

今回の調査によって、清水寺岡遺跡から弥生時代中期後半～後期前半の集落跡が検出されたことから、清近岡遺跡の土壙墓群と共に、従来不鮮明であった高知県東部の様相についての手掛かりが得られ、高知県下の弥生時代社会の展開について総合的に比較検討することが可能となった。

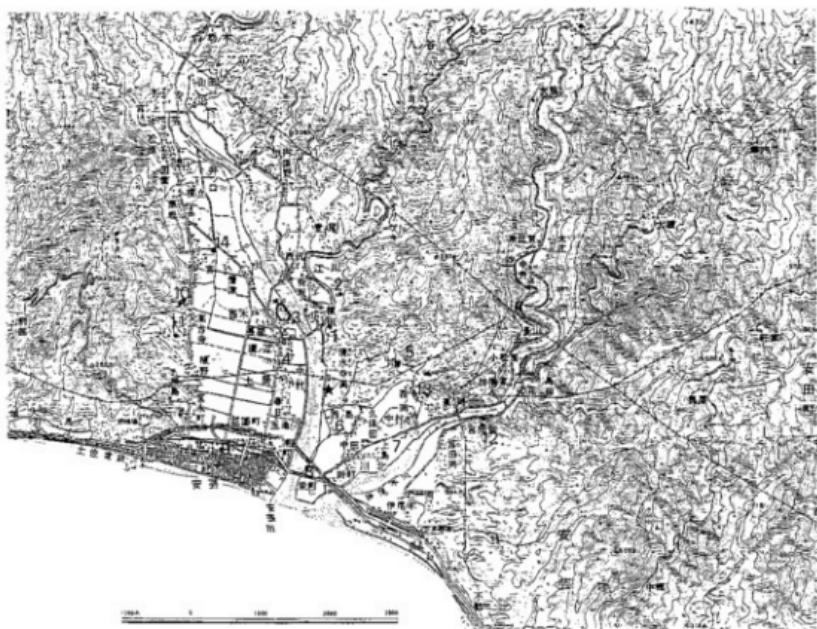


Fig 2 周辺の遺跡

安芸市内弥生時代遺跡分布図

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 江川遺跡(銅矛・磨製石斧・弥生土器) | 8 安芸橋遺跡(弥生土器) |
| 2 日林坊遺跡(弥生壺棺) | 9 江ノ川畔遺跡(弥生土器) |
| 3 土居遺跡(弥生土器) | 10 清近岡遺跡(弥生土器・土塙墓群) |
| 4 上中遺跡(弥生土器) | 11 高台寺遺跡(磨製石斧) |
| 5 川北八坂遺跡(弥生土器・有柄式石剣) | 12 伊尾木遺跡(銅鐸出土地) |
| 6 西ノ島遺跡(弥生土器・打製石錐) | 13 川北甲遺跡(弥生土器) |
| 7 上島遺跡(弥生土器) | 14 一ノ宮遺跡(弥生土器) |

III 調査の概要

試掘調査……市立清水寺岡体育馆建設予定地である清水ヶ丘中学校グランド南側の畠地を対象に、調査区西側に東西8m南北11mの発掘区を、また東側にトレンチ（東西4m南北2m）二ヶ所を設定し調査を行った。調査区東側のトレンチ調査では遺構等の所在は確認されなかつたが、西側の発掘区から地表下70~80cmで竪穴住居跡・溝・土壤・ピット等が検出され、出土遺物の内容から弥生時代中期後半~後期前半に属する遺構等が形成されていることが確認された。

本発掘調査…調査区西側で遺構等が確認されたため、継続して緊急発掘調査を行った。発掘区を東側及び北側に拡張して遺構等の検出作業を行い、トレンチ調査で遺構等が確認されなかつた調査区東側の一部を耕土置場とした。調査の結果、竪穴住居跡6棟・土壤・溝・ピットなどを検出し、集落跡の一画であることが明らかとなつた。総発掘面積は720m²である。

層序…………調査区は、安芸川左岸の河岸段丘上で、南西に延びる丘陵の山裾に位置し、調査前は標高18.80m前後の平坦な畠地であった。調査区の北側は清水ヶ丘中学校グランドに接し、東側は丘陵斜面に、また南側は丘陵端で墓地となっている。調査区北側のグランドは、東側の丘陵斜面を削平して造成されており、調査区も当初は造成工事時の大幅な乱を受けているものとみられていた。しかし、試掘調査で判明したとおり、調査対象地東側ではかく乱がみられるものの、西側では遺物包含層及び遺構等が残存し、造成工事時の影響を直接受けていないことが明らかとなつた。調査区北側の堆積土に（グランド下）、旧耕作土である暗灰色粘質土がみられることから（標高19.40m前後）、造成工事前は段状の畠地等が所在し、工事時には学校敷地側に厚さ0.9~1.7mの盛土が施されたものとみられる。

調査区の堆積土は表土下4~8層に区分されるもので、遺物包含層は暗灰色粘砂土及び黒灰色粘砂土（黒ボク土で火山灰土）が、遺構検出面は淡黄茶色粘礫土上であった。土層序は、調査区南西側で第Ⅰ層暗灰色粘質土（耕作土）、第Ⅱ層暗黒灰色粘砂土、第Ⅲ層黒灰色粘砂土、第Ⅳ層淡黄茶色粘礫土がみられ、調査区北側（グランド側）では、第Ⅰ層黄茶色粘質土（表土）、第Ⅱ層灰色砂土、第Ⅲ層淡茶褐色粘礫土、第Ⅳ層暗灰色粘質土（旧耕作土）、第Ⅴ層褐色粘砂土、第Ⅵ層暗褐色粘砂土、第Ⅶ層黒灰色粘砂土、第Ⅷ層淡黄茶色粘礫土が堆積していた。遺物包含層は調査区西側で厚さ20~30cm、北側で10~15cmの厚みをもち、南及び南西方向へ傾斜して堆積していた。また、遺構検出面の淡黄茶色粘礫土は、調査区南西隅と北東隅とで比高差1.10m前後を測り、南及び南西方向への傾斜面となっていた。土層の堆積状態等から、遺構形成時に南西方向への緩やかな傾斜地が存在していたものと考えられる。

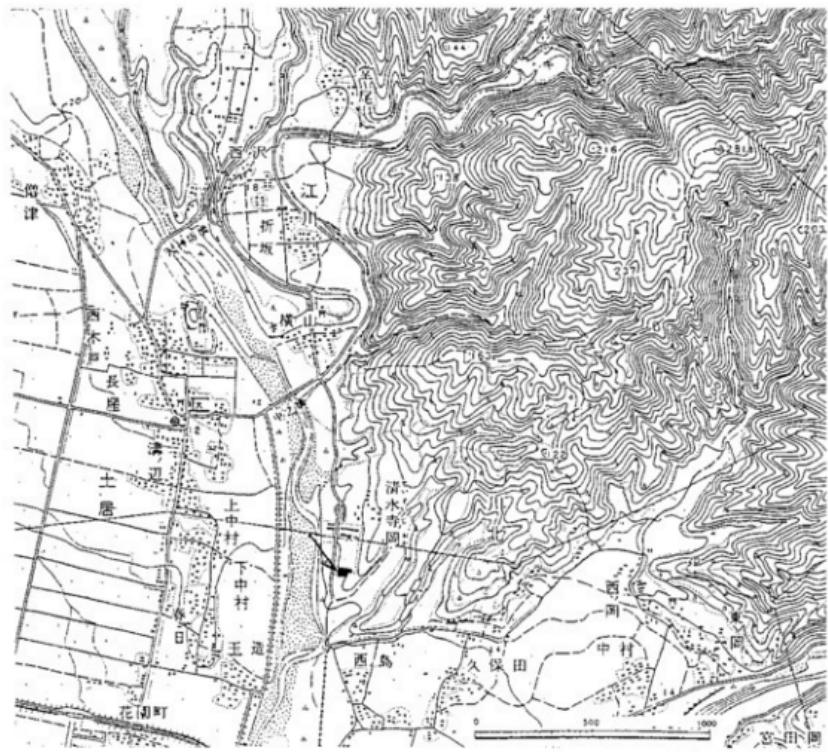


Fig 3 調査地点位置図

IV 検出遺構と出土遺物

検出遺構

堅穴住居址 6・土壙 3・溝 12・柱穴・ピット等を検出した。遺構は淡黄茶色粘硬土上で検出され、覆土は黒灰色粘砂土である。

ST 1

東西がやや長い楕円形を呈する堅穴住居址で、長径4.7m 短径4.34mを測る。壁高は北側で10

～14cm、南側で7～15cmを測る。南東隅で一部拡張されている。覆土中から、弥生土器・磨製石臼・叩石・燧石が出土し、住居址北東部からの出土点数が多い。

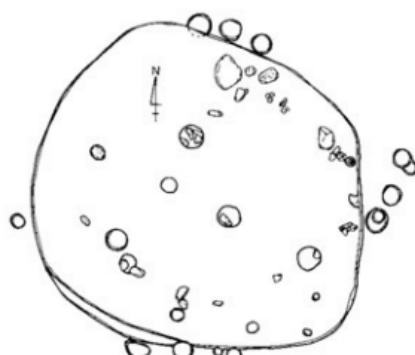
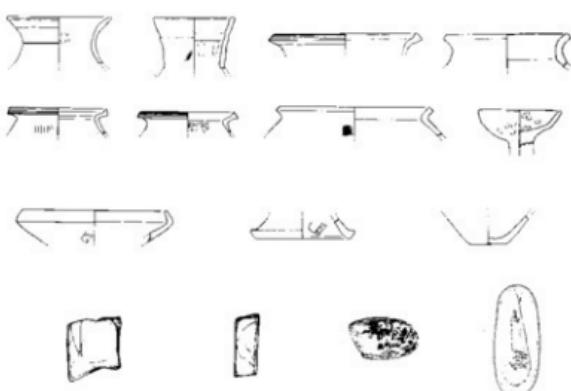


Fig. 4 ST 1 出土遺物

S T 2

径5.0~5.3m前後を測る楕円状の平面形を呈する竪穴住居址で、壁高は北側で6~10cm、南側で14~18cmを測る。中央穴をもち、主柱穴は中央ピット周囲の径35~40cm深さ8~20cm前後のピット6~7個により構成されるものとみられるが、二度以上の増築が認められる。なお、床上からは住居址廃絶後に形成されたと考えられるピットも重複して検出されている。中央穴は径45~50cm深さ15~18cmを測り、住居址のほぼ中央部に掘削されている。住居址内の覆土中から弥生土器壺・甕・鉢が出土したが、出土点数は少なかった。

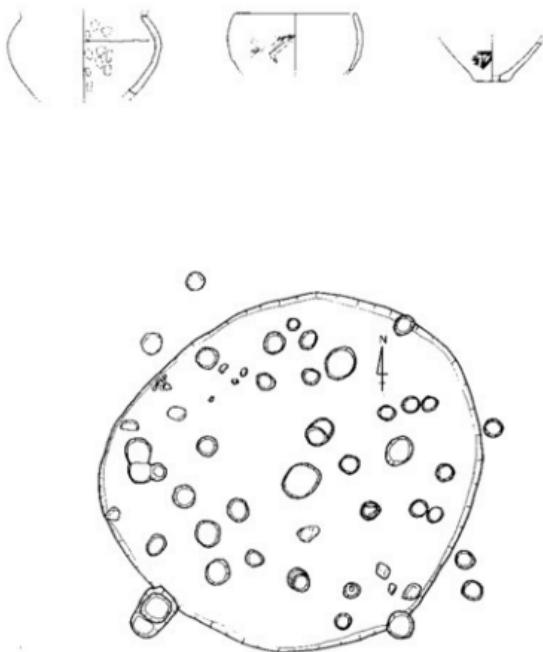


Fig 5 S T 2 出土遺物

S T 3

調査区北西部に構築された竪穴住居址で、東西径7.8m南北径7.7mの不整円形を呈する。壁際に幅35cm深さ5~8cmの溝を周囲にめぐらした周溝をもち、床面中央部には主軸を東にむけた炉址（中央穴）が認められる。床上から34個のビットが検出され、径20~25cm前後深さ14~20cm前後を測るものと、径35~40cm深さ25~31cm前後の一群に大別され、このうち後者は主柱穴とみられる。中央穴は、東西径1.7m南北径50~70cm深さ26cmを測るもので、周辺3ヶ所には幅35~40cmの範囲で床上に焼土面が確認された。住居址の壁高は東側で20cm前後を測るもの、西側は4~5cmで残存度は良くなかった。覆土中から、弥生土器壺・甕・高杯・小型扁平片刃石斧・石鎌・石錐・土製紡錘車・投弾・凹石・磨石・石器剝片等が出土したが、特にサヌカイト製石鎌13点・石錐1点・石鎌未製品2点に加え、約8,000点を数えるサヌカイトの石器剝片・チップが出土し、うち約3,000点の石器剝片・チップが住居址北東部で集中して出土した。

S T 4

隅丸方形の竪穴住居址で、長辺は西側で5.6m、東側で4.8m、短辺は北側、南側共に4.2~4.3mを測り、西側部でやや広がった平面形を呈する。壁高は北側で12~18cm、南側で17~23cmを測る。床上から10個のビットが検出され、検出状態から主柱4本で構築された住居址で、二時期にわたる建直しが行われたものとみられる。主柱は径25~30cm深さ10~29cm前後のものと、径30~45cm深さ6~31cmを測るものに区分される。柱穴の位置、西側に長辺をもつことなどから、西側への拡張が行われたものと推察される。覆土中から弥生土器壺・甕・磨製石鎌・砥石が出土した。

S T 5

東西径5.7m南北径6.2mを測る円形の竪穴住居址で、西側に幅15cm長さ2.0mの範囲で張り出しを有す。住居址中央部に東西径60cm南北径55cmの中央穴をもつ。主柱穴は多角形（六角形）に配した径25cm深さ8~31cmのもので構成されるが、径30~35cm深さ10~14cmの柱穴もみられ、すくなくとも二時期にわたる建直し（増築）がうかがわれる。壁高は北側で8~10cm、南側で5~8cmを測る。覆土中から弥生土器壺・甕・高杯・石鎌が出土した。

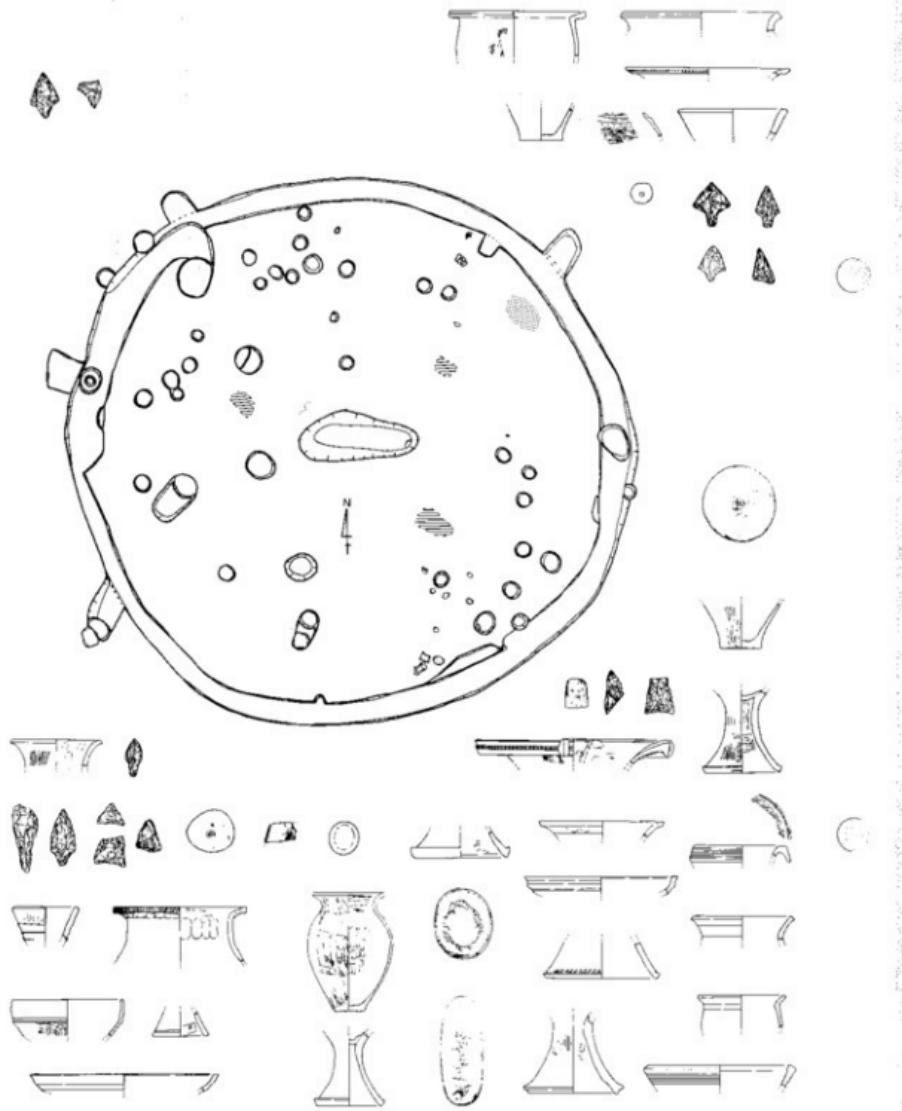


Fig 6 ST 3 出土遺物

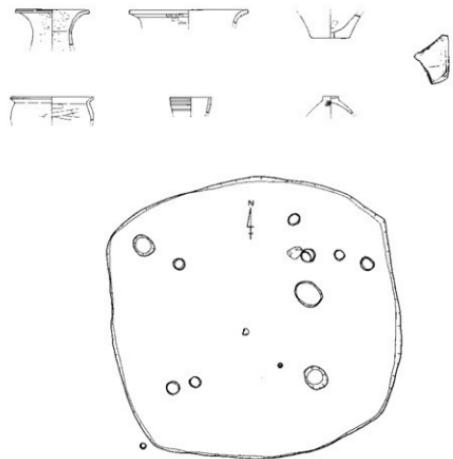


Fig 7 ST 4 出土遗物

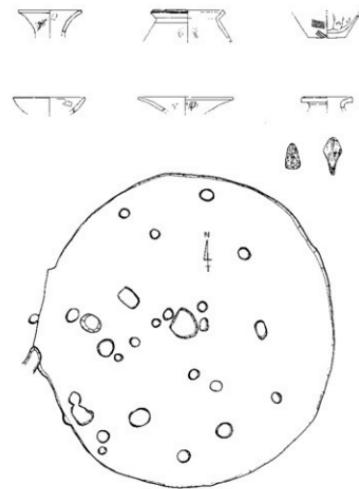


Fig 8 ST 5 出土遗物

S T 6

S T 3 と S T 5 間で検出された竪穴住居址である。中央穴及び主柱穴が検出されたが、壁は検出されなかった。主柱穴は、径40~45cm前後で、柱穴の配置から4本柱の構成をもつものと考えられる。S T 5 西側にみられる溝状の遺構がS T 6 関連遺構であるとすれば、一辺4.6~4.9m 前後の隅丸方形の住居址であった可能をもつ。なお、中央穴は長径1.5m 短径0.8m 前後で主軸は北西方向である。また、住居址内の覆土中から弥生土器壺・甕・高杯が出た。

S K 1

S T 1 の南西部で検出された舟形状の土壤である。長さ4.6m 幅60~80cm を測り、黒灰色粘砂土が堆積していた。弥生土器片の集中がみられ、弥生土器壺(61~68)・石錠(99)が出土した。

S K 2

S T 3 北東部で検出された土壤で、長径2.4m 短径1.1~1.2m を測る。埋土は、黒灰色粘砂土で、弥生土器壺片(66・67)が出土した。

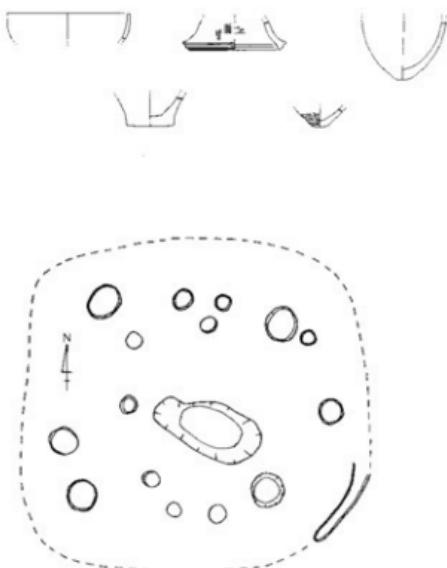


Fig 9 S T 6 出土遺物

S K 3

調査区北東部、S T 5 北側で検出された円形の土壤で、全体の約 $\frac{1}{2}$ 程度を検出した。径2.5m 前後の平面形をもつものとみられる。覆土中から弥生土器甕(69)等が出土した。

その他の遺構

調査区南側及び南東部・中央部から、溝・ピット等が、また調査区全体にかけてピット等が検出された。ピットの中には、規則性をもつものもみられ、掘立柱建物址の一部又は棚列等を構成するものと推察されるが、全体の形状については不明確であった。

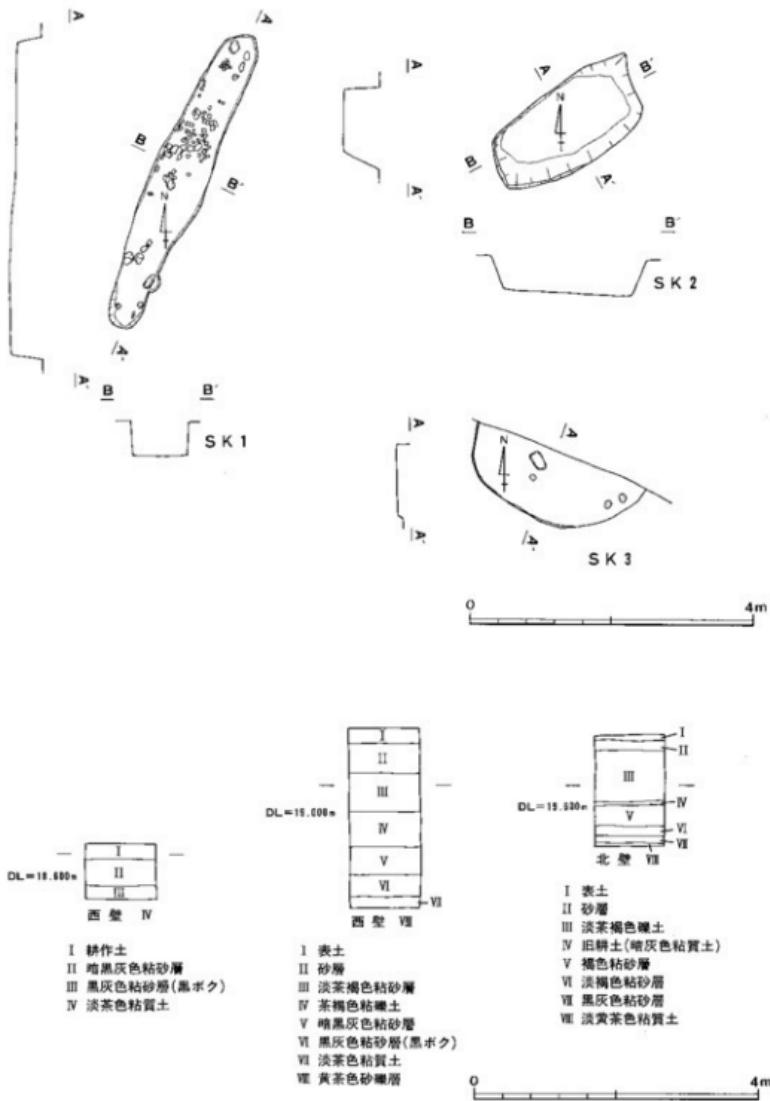


Fig 10 SK 1・2・3 平面図・土層断面図

出土遺物

土器（図5～9）

S T 1～6・S K 1～3・溝・ビット、包含層中から弥生土器壺・甕・高杯・鉢が出土した。

S T 1………壺（1・2・4・6）、甕（3・5・7）、高杯（9～11）が出土した。壺・甕は凹線文をもたないものと、凹線文をもち口縁端部を上方に拡張したものがみられる。高杯はC字型口縁を呈するものと、鉢型の杯部を有するものがみられた。

S T 2………壺（12）・甕（14）・鉢（13）が出土した。壺は、丸味を帯びた体部を有し内面には指頭圧痕が顕著である。鉢は内湾する体部を有し、外面は丁寧なハケ調整がみられる。

S T 3………壺（15～23）・甕（24～31）・高杯（33～42）・土製紡錘車（32）が出土した。壺は、在地のもの（17～19・23）に加え、高知県西部からの搬入品（15・16）・瀬戸内系の土器（20・21）などがみられる。また、甕は凹線文をもたないものが大半である。高杯は、凹線文が発達したもの（33・34）、凹線文をもたないもの（35）がみられる。また、高杯脚部については、内面ヘラ削り、外面に縱方向のヘラ磨きが施されるもの（37・38）、刺突列点文を施すもの（40）などがみられ、数類に区分される。土製紡錘車（32）は、土器片（胴部片）を利用したもので、中央部に片側（内面側）から穿孔を施す。

S T 4………壺（43～45・47）・甕（48）・蓋（46）が出土した。壺45は、外面に凹線文をもつ口縁部片である。また43は口縁端部を外方に折り返したもので、外面には顕著な指頭圧痕を有する。

S T 5………壺（49～51）・甕（52）・高杯（53・54）が出土した。壺51は叩き目をもつ。また、高杯54は外方に大きく開く脚底部をもつものである。

S T 6………壺（55・56・58）・高杯（57・59）が出土した。壺55・56は底径の小さな底部をもち、56は叩き目がみられる底部片である。S T 6の平面形態から、S T 6は壺55・56の時期に該当するものと推察される。

S K 1………壺（61～65）が出土した。63は最大径を胴部上半にもち、ク字型に外反する口縁部を有する。61・64は口縁端部を外方に折り返して成形し、指頭圧痕をもつ。61・63・64共に、口縁部と胴部の境に1条の沈線を施し、沈線下に刺突文を加えている。

S K 2………壺口縁部（66）・底部（67）が出土した。66の口縁部外面には縱方向のハケ目が施される。

S K 3………甕（69）が出土した。胴部上半に最大径をもち、口縁部外面は縦凹線を有する。内面胴部下半はヘラ削りが施され、器内は薄く仕上げられている。外面胴部下半から上胴部にかけて縦方向に丁寧なヘラ磨きが施されている。成形技法・形態から搬入品とみられる。

石器

石鎌 (図10) ……S T 3～5、S K 1の覆土中から出土した。すべてサヌカイトを石材とするもので、特に83～95は約8,000点におよぶ石器剝片・チップと共にS T 3の覆土中から出土したものである。基辺の形状、茎の有無から、平基(93・97)、凹基(91・92)、凸基無茎(98・99)、凸基有茎(83～89・100)の各形式に区分することができる。また、凸基有茎式については、側辺の形状が直線状のもの(83～86)、外湾弧状のもの(87・88)に区別される。なお、100はS T 4出土の磨製石鎌である。83～95については、S T 3において製作された打製石鎌で、89～92・94・95は製作過程で破損した未製品とみられる。

石錐 (図10・96) ……S T 3出土で、サヌカイトを材料とする。全長4.9cm、錐部の長さ2.4cm重さ4.7gを測る。

石包丁 (101・111) ……101はS T 1から出土した磨製石包丁で、緑泥片岩を素材とする。丸味を帯びた側辺を有し、両面穿孔の双孔をもつ。刃部には使用痕がみられる。111は、S T 3出土で、背部の破片である。

扁平片刃石斧 (110) ……全長4.3cm・幅3.2cm・厚さ1.1cm・重量35gを測る緑色岩製の小型石斧でS T 3から出土した。

投弾 (109) ……S T 3出土で、茶色珪岩を素材とする。ほぼ球状を呈し、丁寧に磨かれている。径4.2cmで重量115gを測る。

四石 (112) ……長径6.8cm短径6.0cm、厚さ2.8cm重量175gを測る。暗灰色の硅岩を素材とし、両側面中央部に径1.2～1.3cm深さ0.4～0.5cmの孔をもつ。表面は良く研磨されている。

砥石 (102・104・105) ……S T 1(102・104)、S T 3(105)から出土した。すべて砂岩を石材とし、両面を使用している。

敲石 (103・106～108)、磨石 (113・114) ……S T 1(103)、S T 3(106～108・113～114)から出土した。敲石は、側面又は両端に打撃痕をもち、砂岩を石材とするものである。また、磨石は側辺に敲打痕又は擦痕をもつもので、敲石と同じく砂岩製である。

石鎌計測表

番号	出土地点	全長cm	幅cm	重量(g)	型式	番号	出土地点	全長cm	幅cm	重量(g)	型式
83	S T 3	3.30	2.05	2.0	凸基有茎	92	S T 3	2.3	2.3	2.2	凹基
84	"	3.2	2.7	2.2	"	93	"	2.47	1.80	1.6	平基
85	"	2.94	1.7	1.7	"	94	"	3.2	1.3	1.4	不明
86	"	2.6	1.9	1.6	"	95	"	1.7	1.85	0.7	"
87	"	4.1	1.8	3.0	"	97	S T 5	2.6	1.5	1.6	平基
88	"	2.8	1.2	1.0	"	98	S K 1	2.95	1.55	1.6	凸基有茎
89	"	1.72	2.00	1.3	"	99	"	4.4	1.3	1.7	"
90	"	2.65	1.53	1.1	不明	100	S T 4	3.8	1.9	"	"
91	"	2.55	2.20	2.5	凹基						

V まとめ

今回の調査で、堅穴住居址6（S T 1～6）、土壙3（S K 1～3）、溝・ピット等が検出され、住居址内覆土中、包含層中から弥生土器壺・甕・高杯・鉢・土製紡錘車・石包丁・石鎌・石錐・砾石・叩石・磨石・凹石・投弾・石器剝片などが出土し、弥生時代中期後半～後期前半に形成された集落跡の一画の様相が明らかとなつた。

調査で得られた所見と今後の問題点にふれて、まとめとしたい。

遺構

S T 1～6、S K 1～3、溝・ピット等が検出された。堅穴住居址及び土壙は、住居址内覆土中から出土した遺物の内容により、弥生時代中期後半、後期前半の二時期に区分されるものであり、また、弥生時代中期後半のなかでは二～三時期に細別することが可能である。

弥生時代中期後半に形成されたものとしては、S T 1～3・5、S K 1～3が^a、また後期前半にはS T 4・6、S K 3が該当する。このなかで、S T 3は中期後半のなかでも古く位置付けられるもので、中期後半初頭に、またS T 1・2・5は中期後半～末に形成されたものと考えられる。S T 3は、住居址内から多量の石器剝片・石鎌未製品・石鎌が出土し、住居址内において石鎌を中心とした石器製作が行われていたことが明らかである。石器製作の具体的な内容を把握するには至らなかったが、製作後の廃棄の一端をうかがうことができた。

遺物

出土遺物のなかで弥生土器は、四線文盛行期（畿内第IV様式）に該当するものが主体である。ただ、S T 1～6出土土器は住居址内出土土器ではあるものの床面からの一括出土ではなく、その多くが覆土中から得られたもので、なかには明らかに型式差をもった土器が混在しており、住居址単位に明確な型式設定を行うことは難しいが、各住居址ごとの出土土器には全体的な分量・組成などから相違が認められ、住居址の形成・廃絶時期についての差違が明らかである。S T 3出土土器は、S T 1・2に比べて高杯・壺に型式差がみられ、今回検出された土器のなかでも古く位置付けることが可能である。また、S T 5・6出土土器については、51・56にみられるように叩き技法が採用された時期に該当し、後期前半（畿内第V様式）に付置付けられよう。S T 4については、隅丸方形の住居址の覆土中から出土したものではあるが、県下の住居址の変遷のなかで、方形住居址の出現は後期前半以降であることなどから、出土土器が直接S T 4の所属時期を示すものではないと考えられる。このように、遺構単位からみれば、弥生時代中期後半初頭にS T 3が形成され、廃絶後S T 1・2の形成が、また、後期前半にはS T 5→6・4の順で住居址が形成されたものとみられる。なお、出土土器のなかには、15・19の如く高知県西部の土器が、また、20・21・69のような中・東部潮戸内からの搬入品もみられ、瀬戸内沿岸・高知県西・中央部との交流もうかがわれる。また、出土土器のなかには高知県西・中央部にはみられない形態をもつものがあり、出土土器の総合的な検討作業が必要と考えられる。

図面・図版

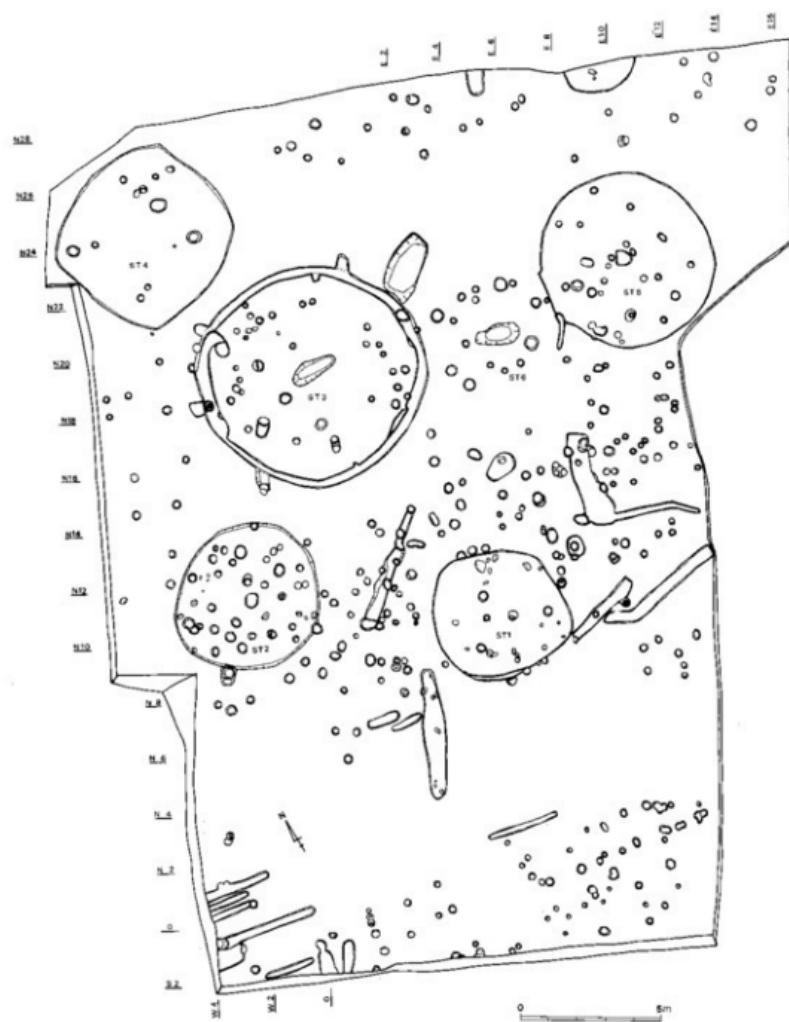
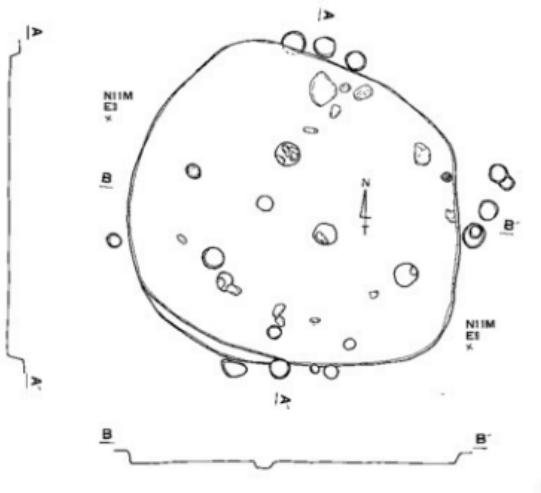
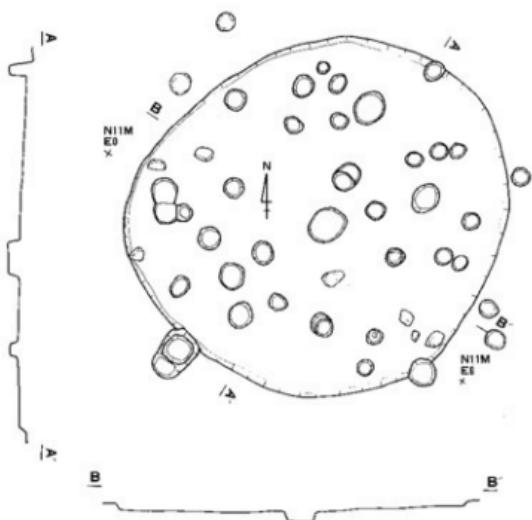


図1 造構全体図



ST 1



ST 2

FIG 2 ST 1 + ST 2



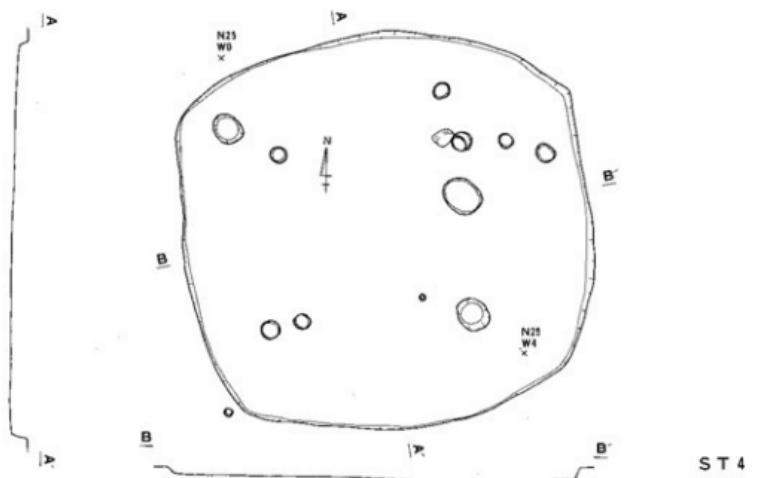
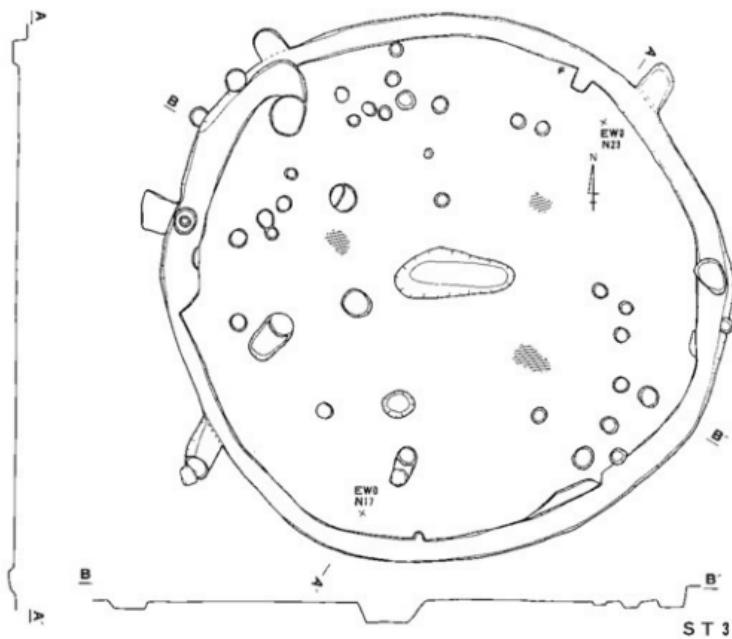
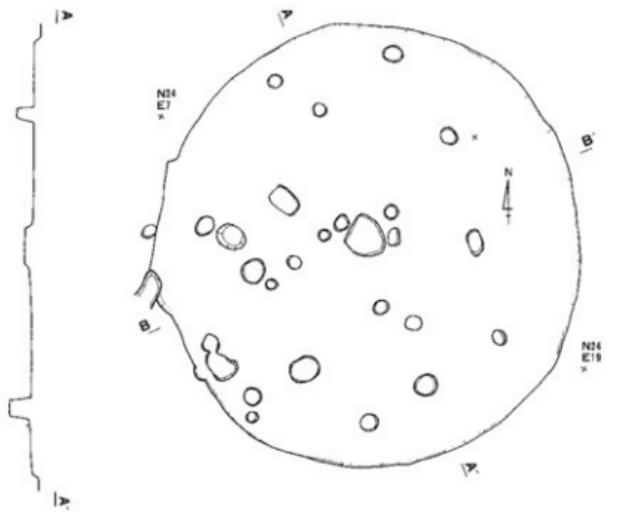


図 3 ST 3・ST 4

0 4m



B B' ST 5

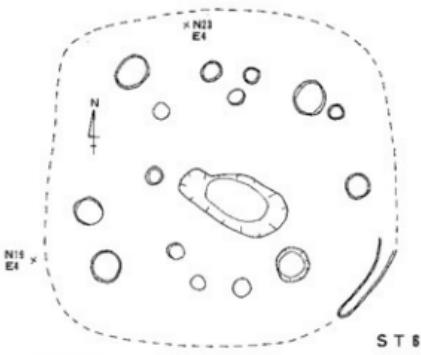


图 4 ST 5 + ST 6



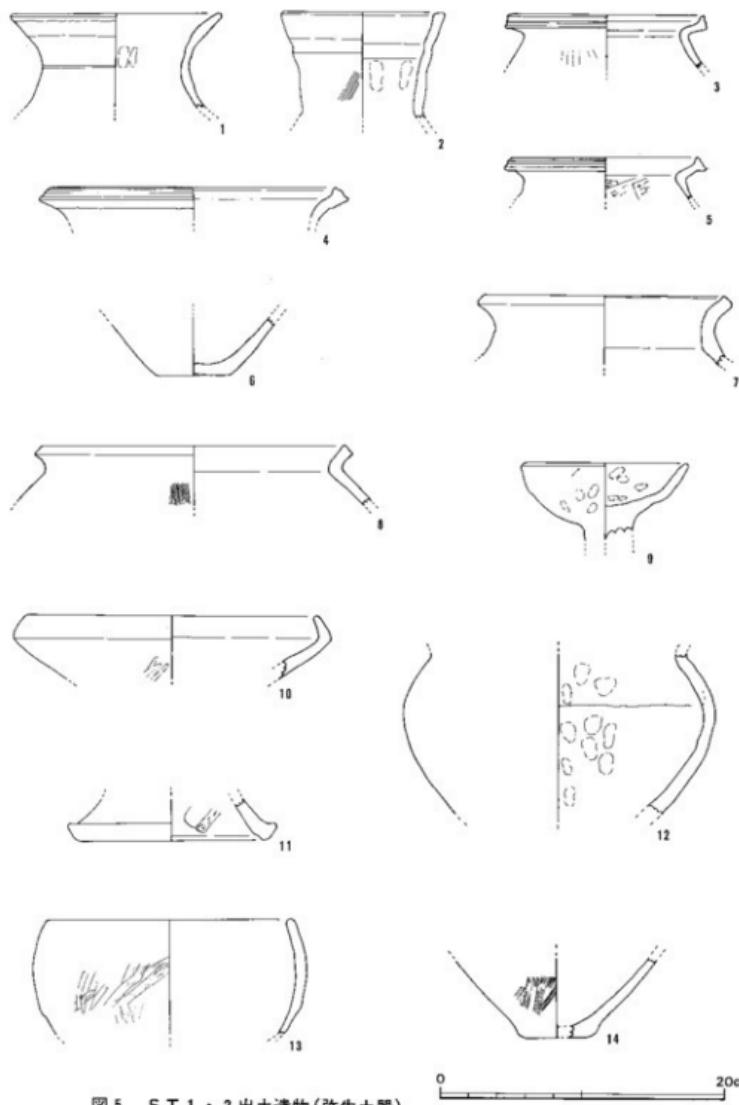


図5 ST 1・2 出土遺物(弥生土器)

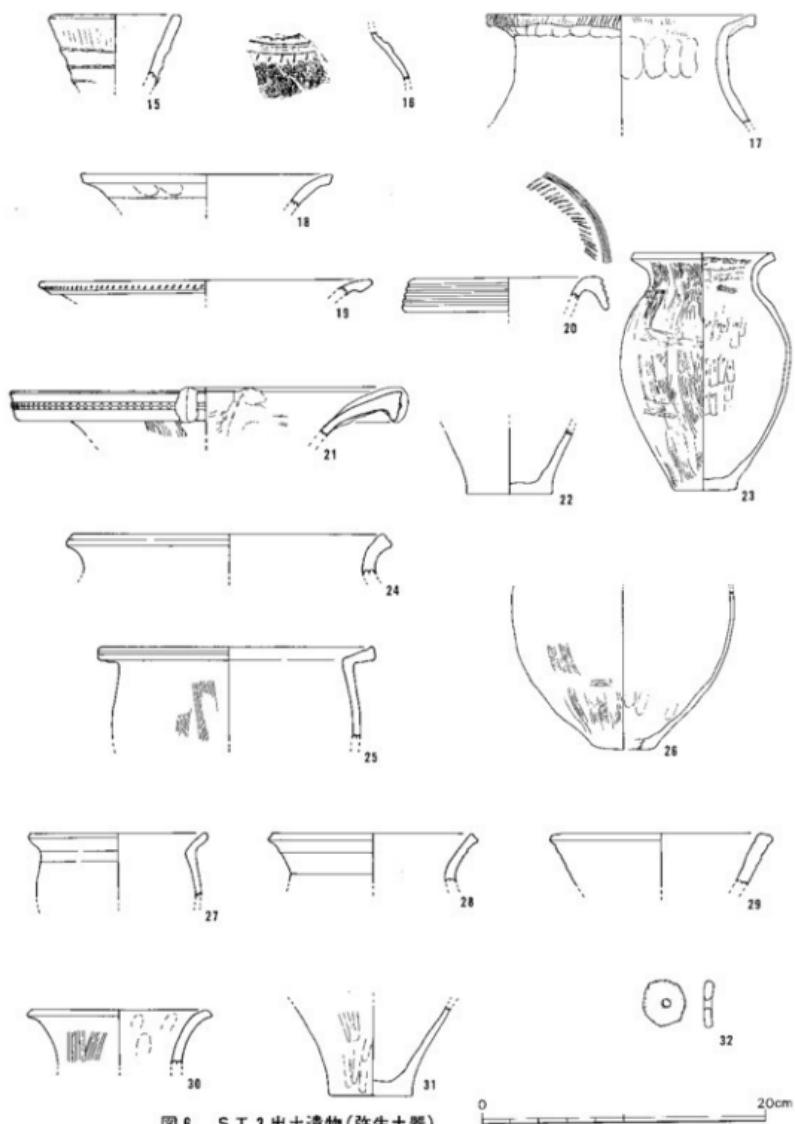


図6 ST3出土遺物(弥生土器)

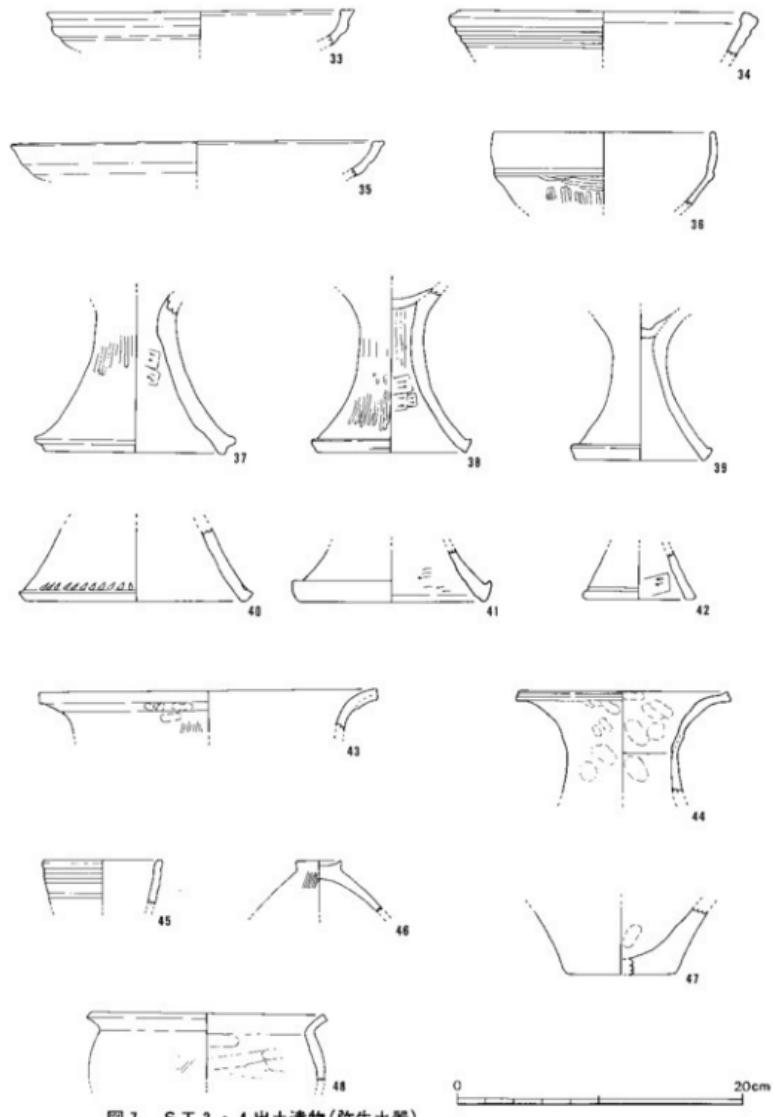


图7 ST 3+4 出土遗物(弥生土器)

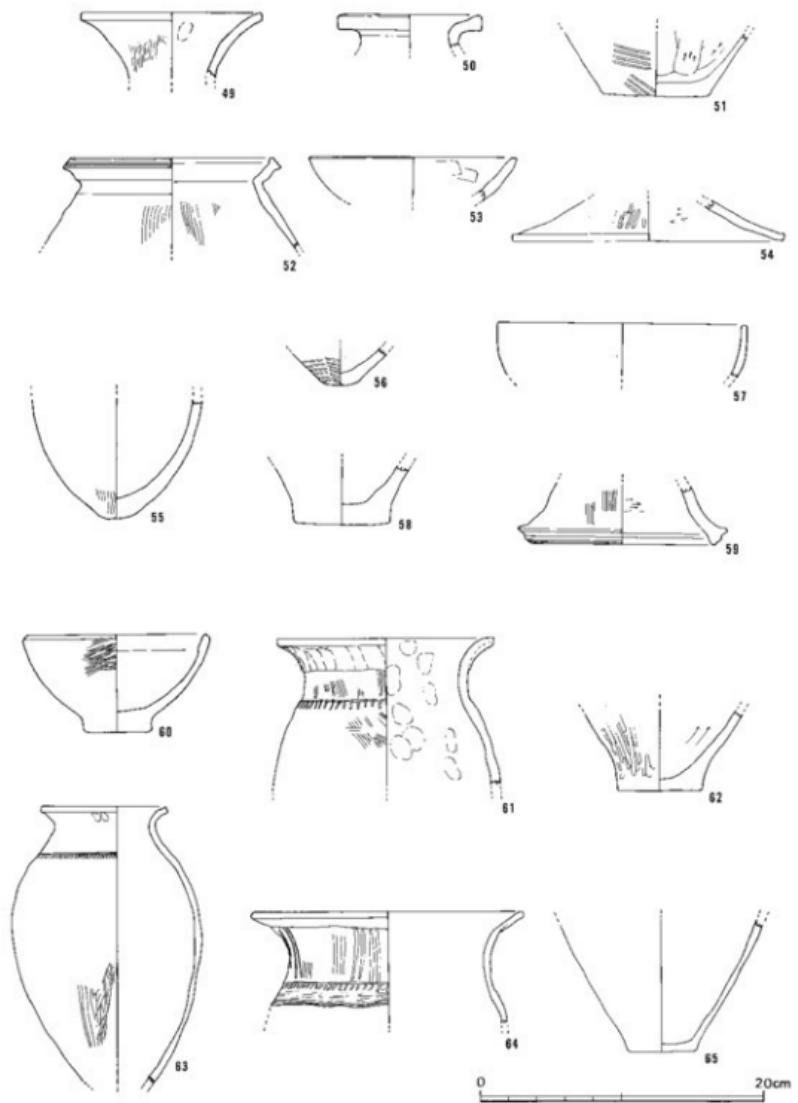


図8 ST 5+6、SD 1、SK 1出土遺物(弥生土器)

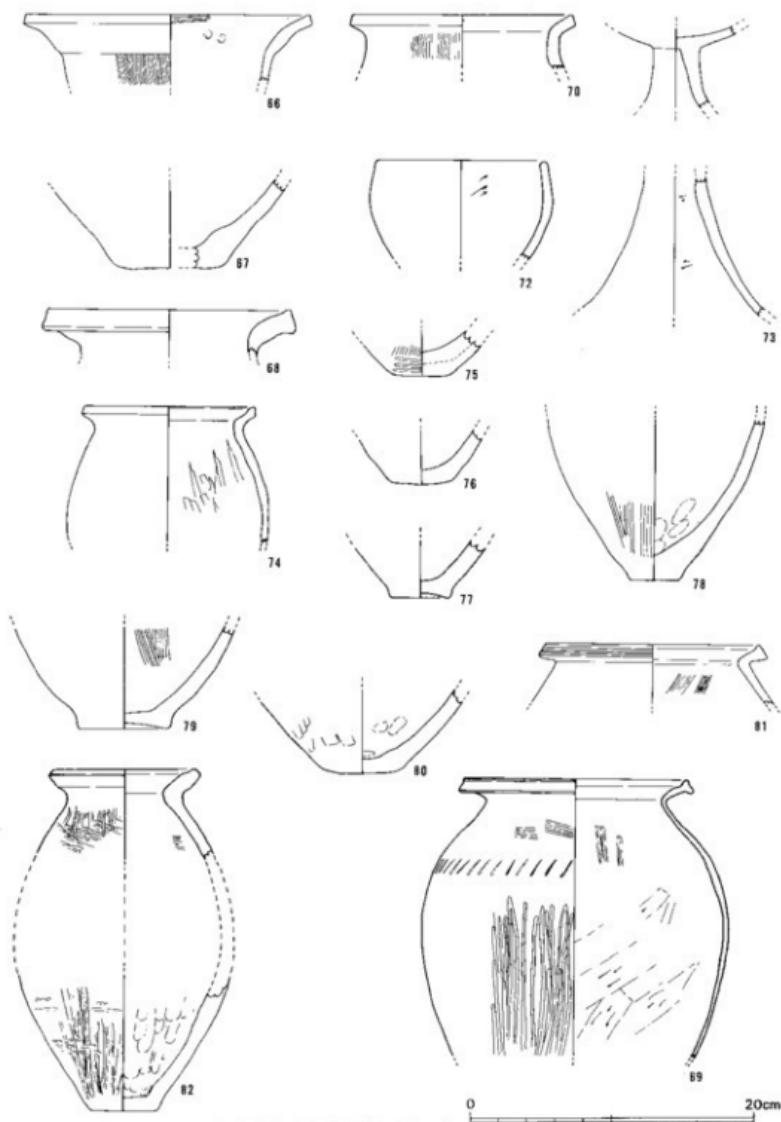


图9 SK 3、包含层等出土遗物(弥生土器)

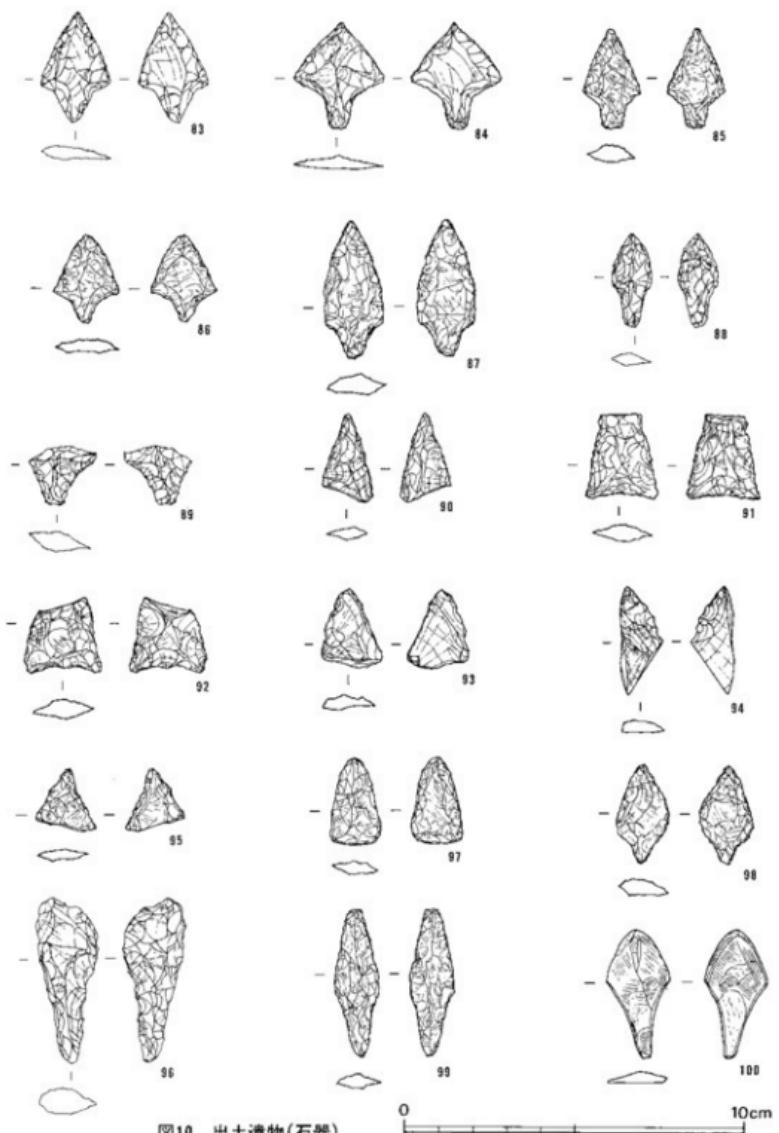
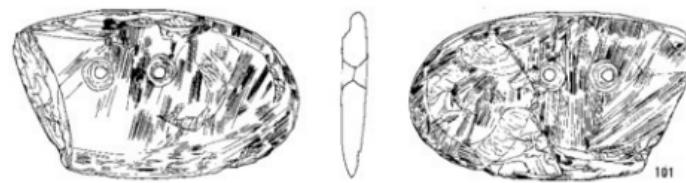
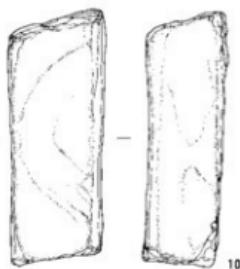


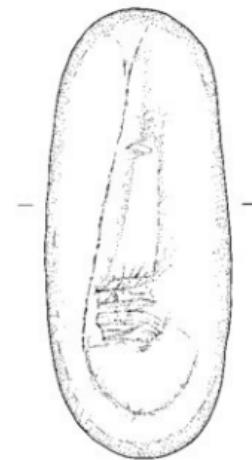
図10 出土遺物(石器)



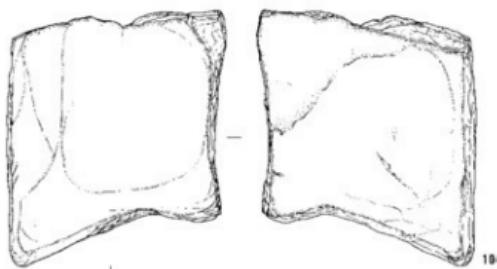
101



102



103



104



図11 出土遺物(石器)

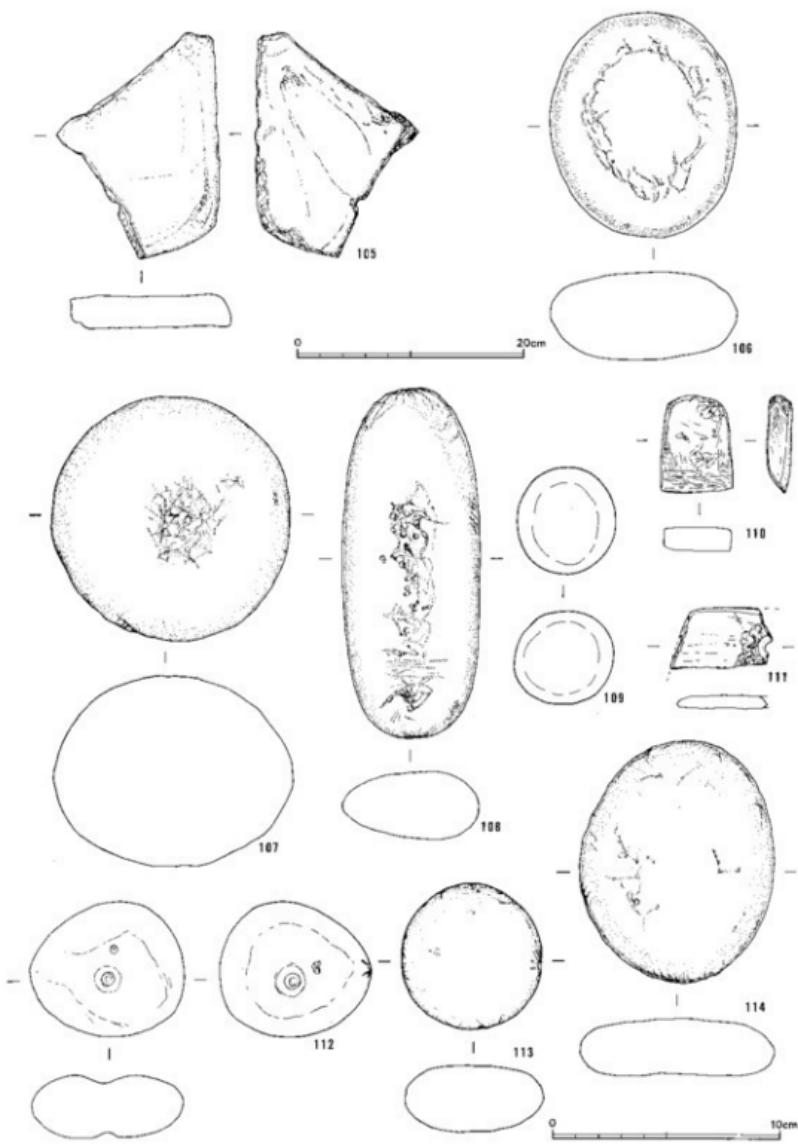


図12 出土遺物(石器)



調査地近景(西から)



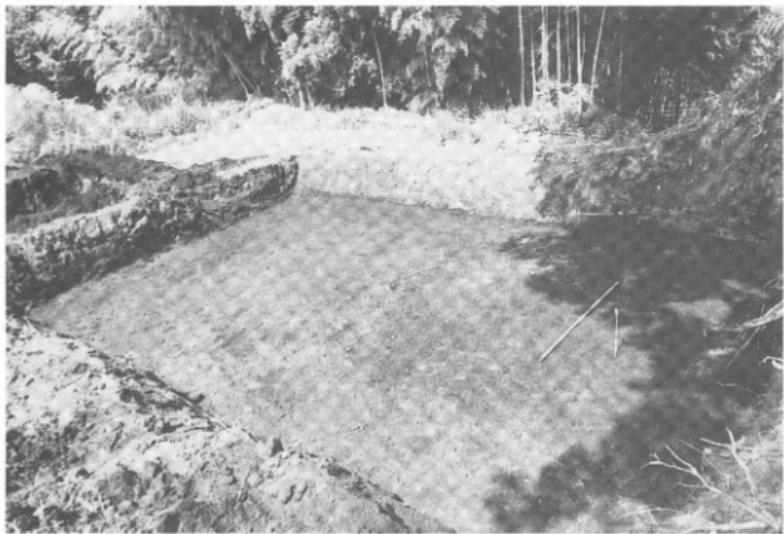
同上(東から)



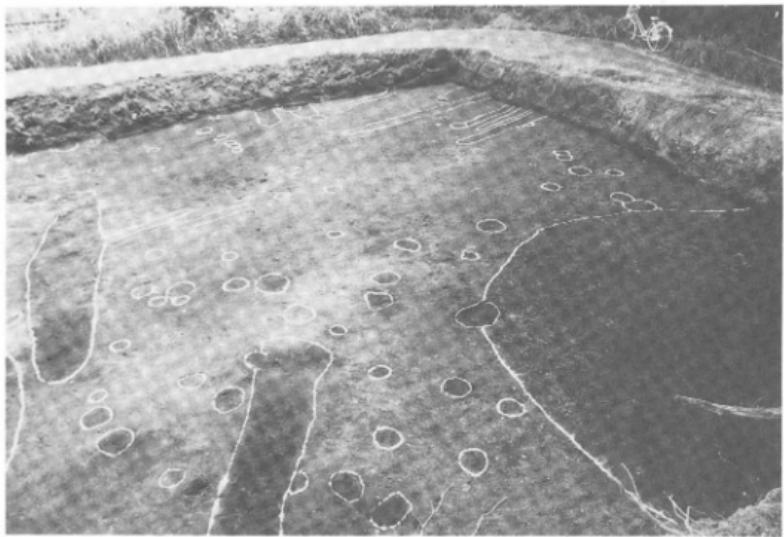
試掘トレンチ(北東から)



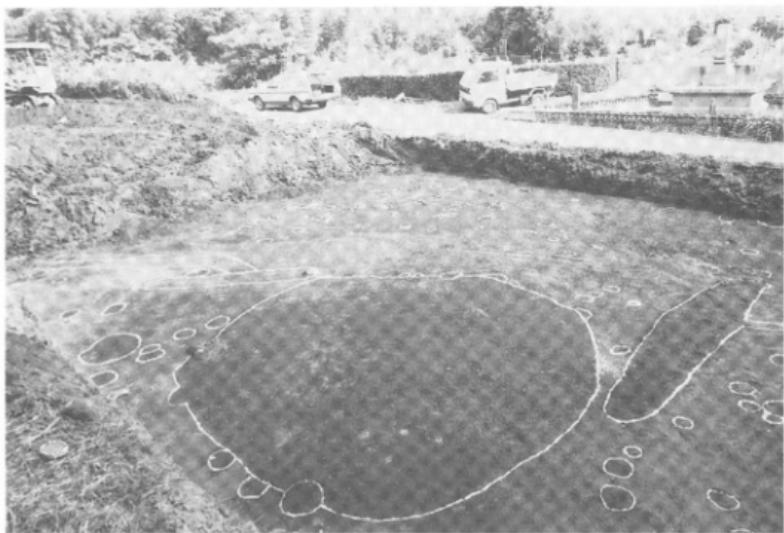
同上(南から)



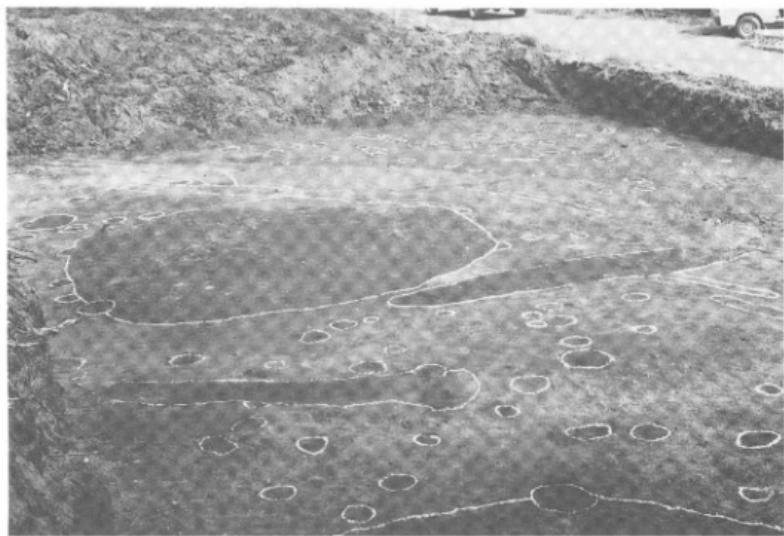
遺構検出状態(東から)



同上(北東から)



S T 1 + S K 1 検出状態(北西から)



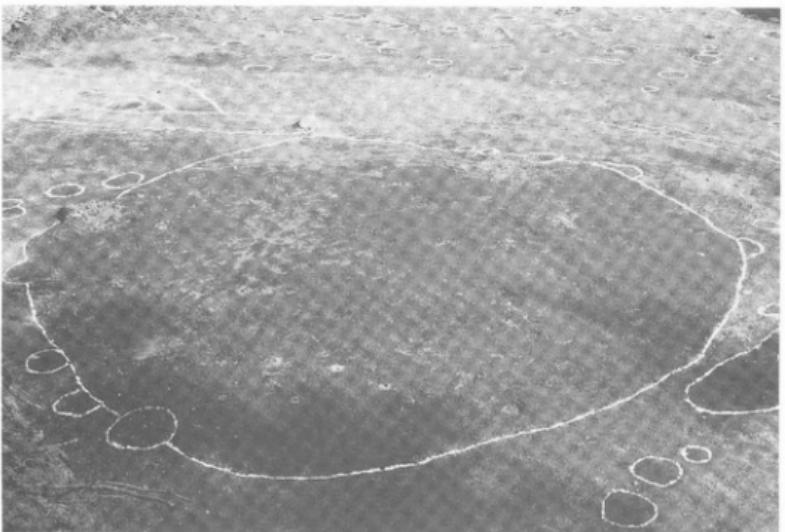
同上(西から)



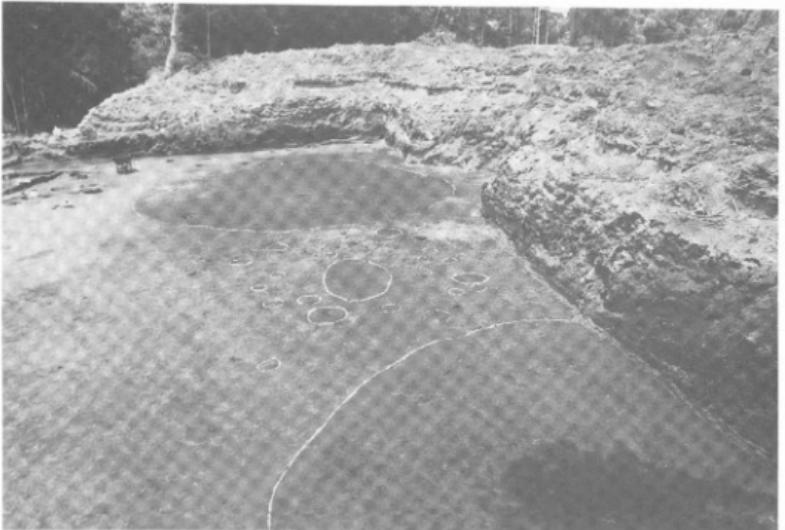
遠構検出状態(南西から)



S T 3 検出状態(西から)



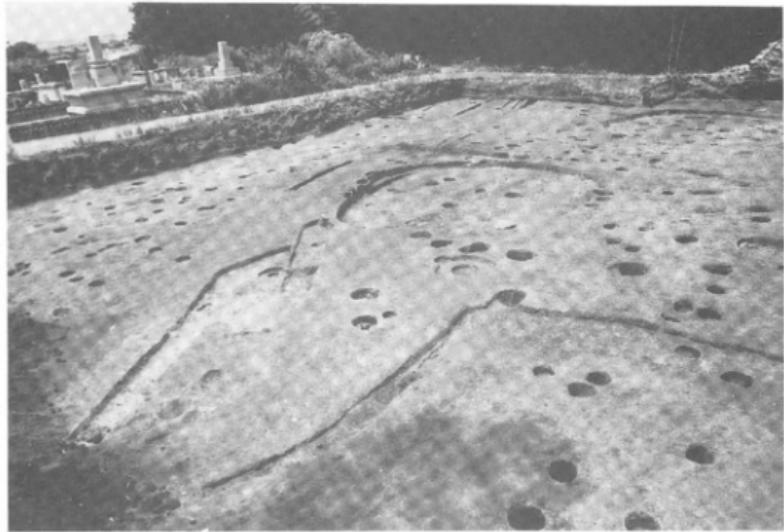
S T 1 検出状態(北から)



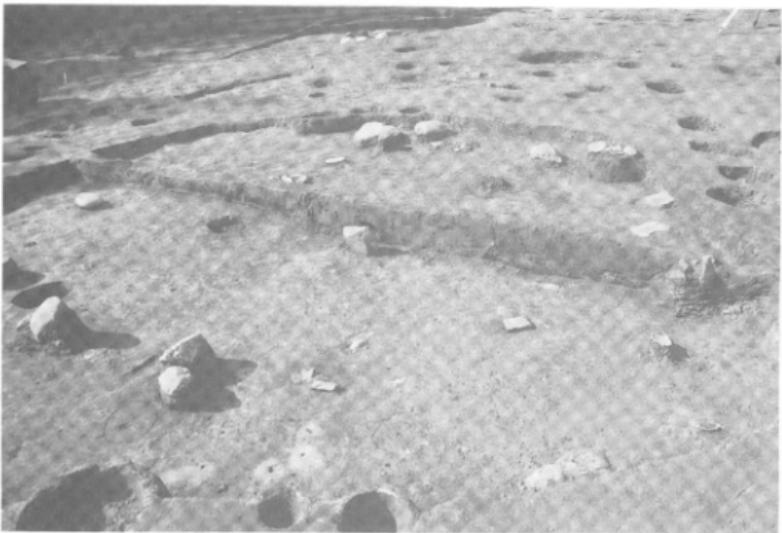
S T 3 (奥)・S T 6・S T 5 (手前)検出状態(東から)



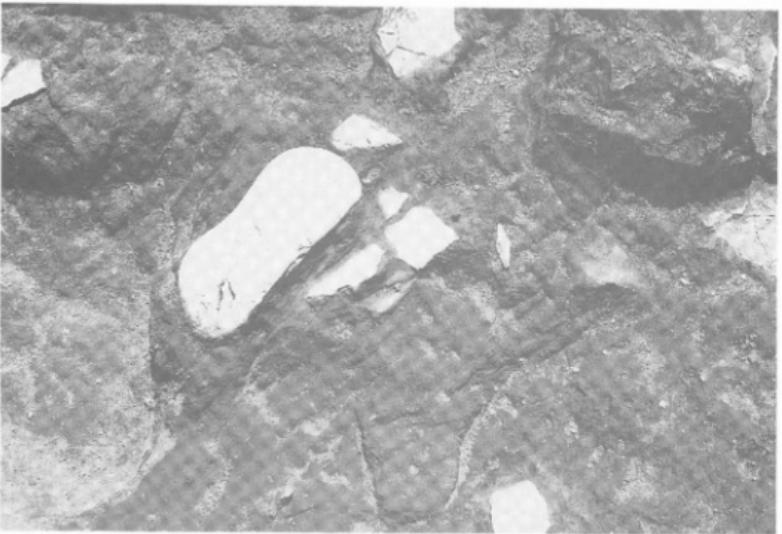
調査区近景(南から)



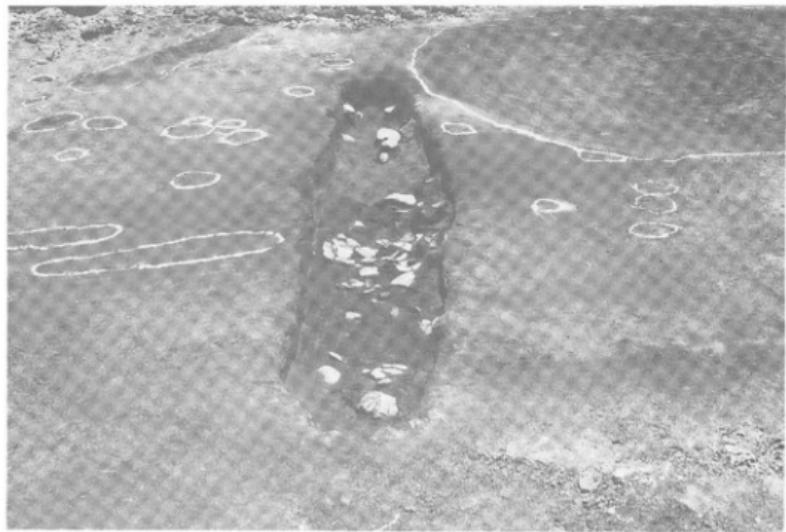
ST 1・ST 2周辺(東から)



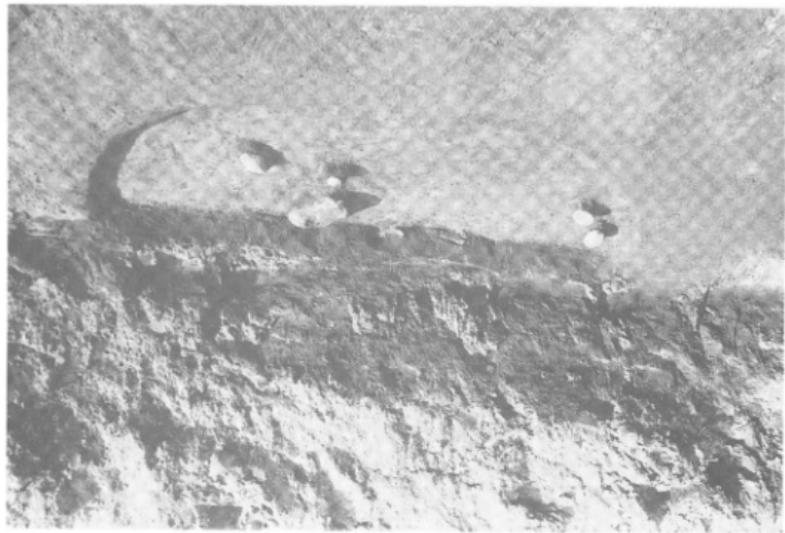
S T 1 遺物出土状態(南から)



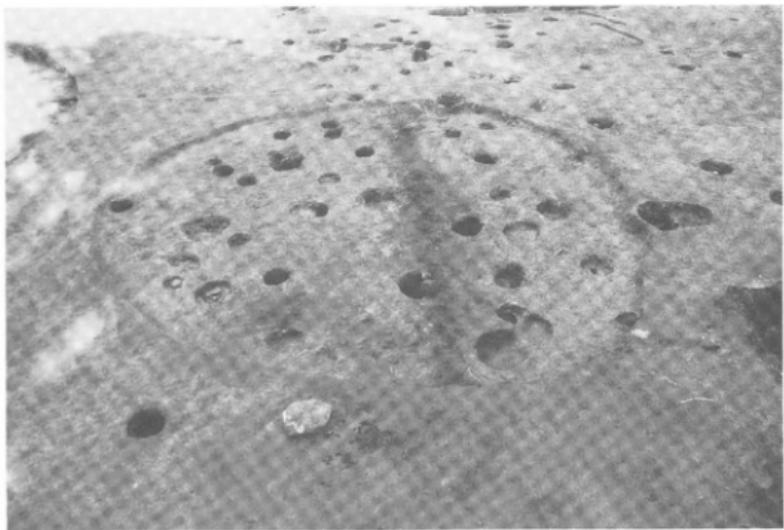
S K 1 遺物出土状態(石鎌・弥生土器・西から)



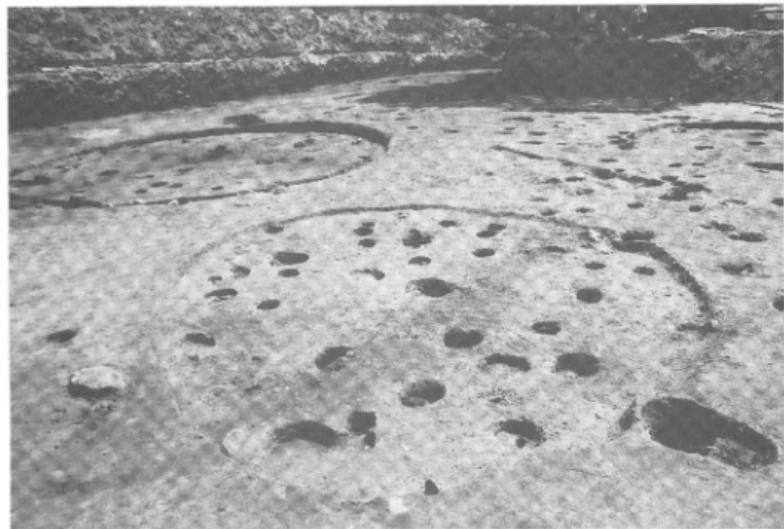
SK 1 (南から)



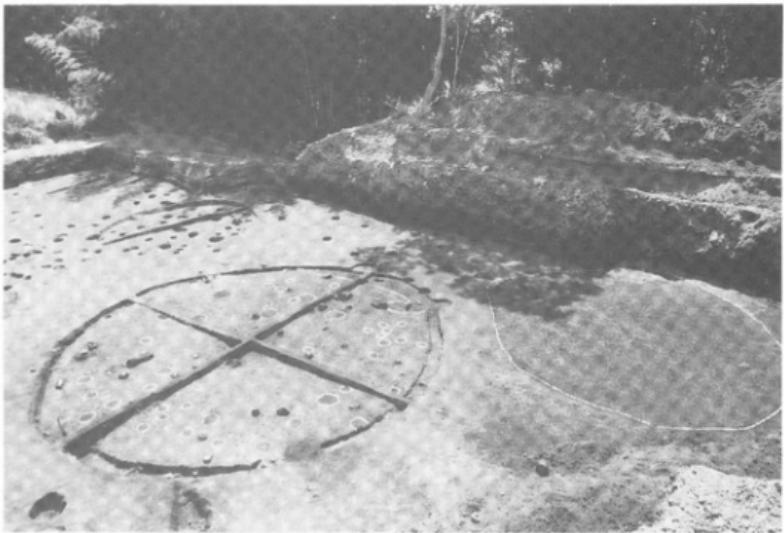
SK 3 (南から)



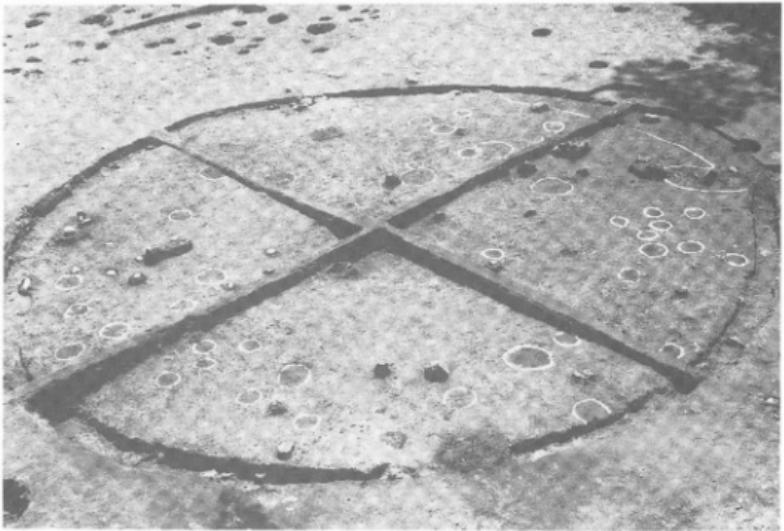
S T 2 (北西から)



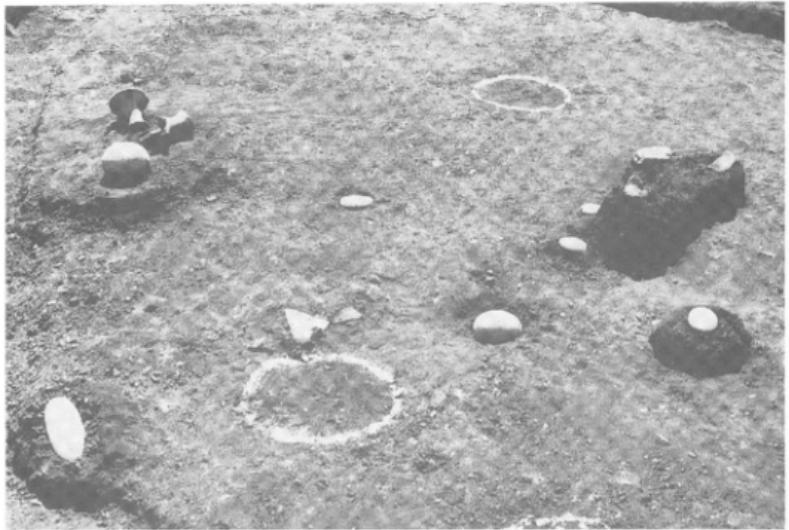
S T 2 • S T 3 (南西から)



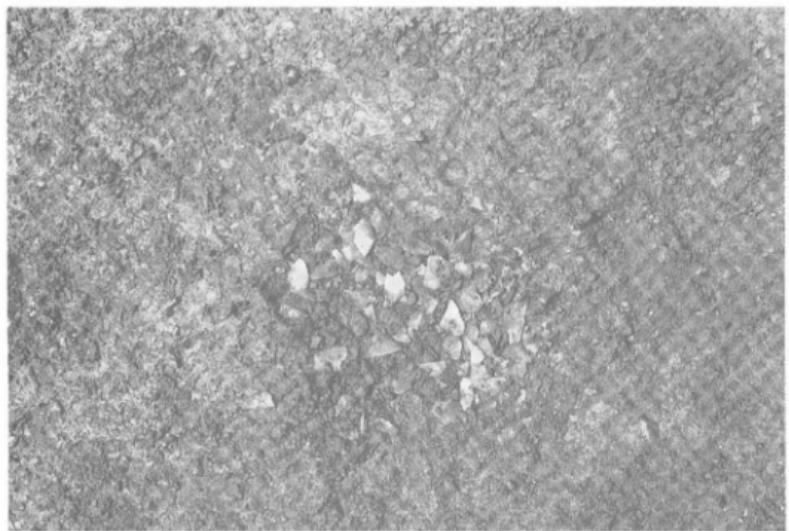
S T 3・S T 4 検出状態(東から)



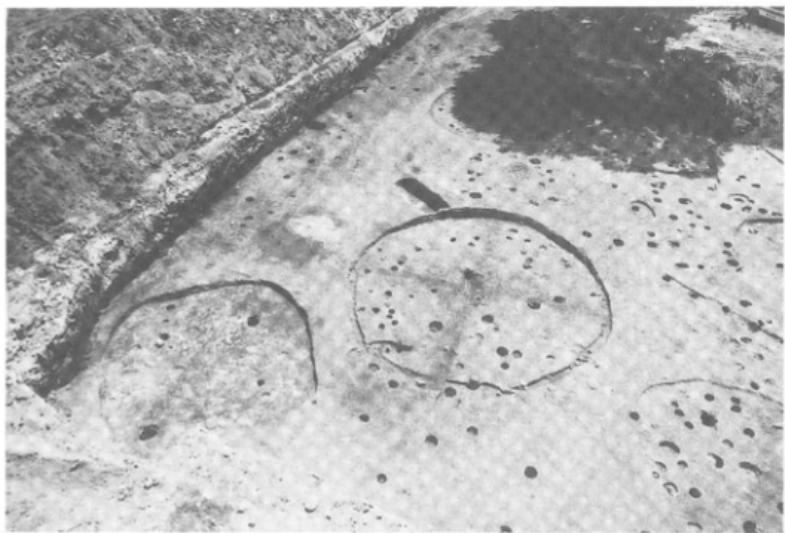
S T 3 検出状態(東から)



S T 3 遺物出土状態(東から)



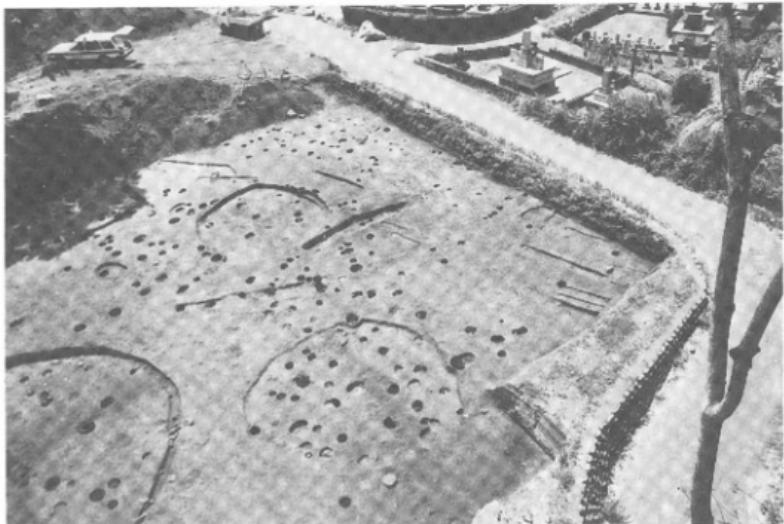
同上(サヌカイト片集中部分・住居址北東部)



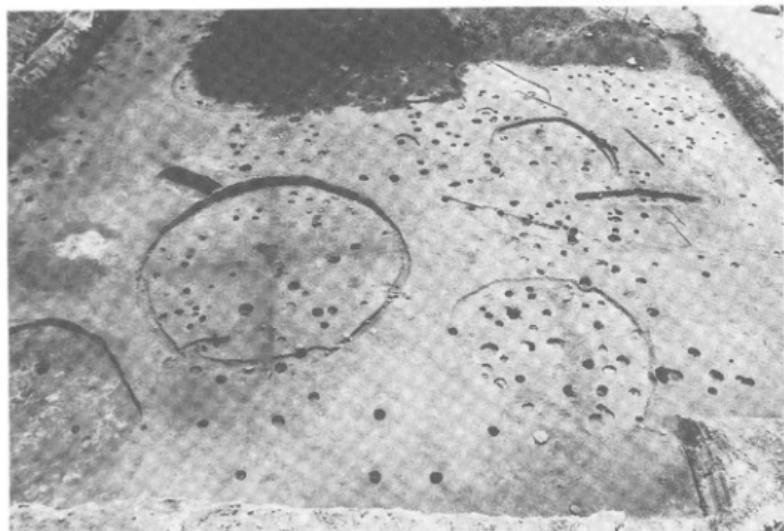
S T 3・4(左S T 4・右S T 3・西から)



同上(左S T 3・右S T 4・東から)



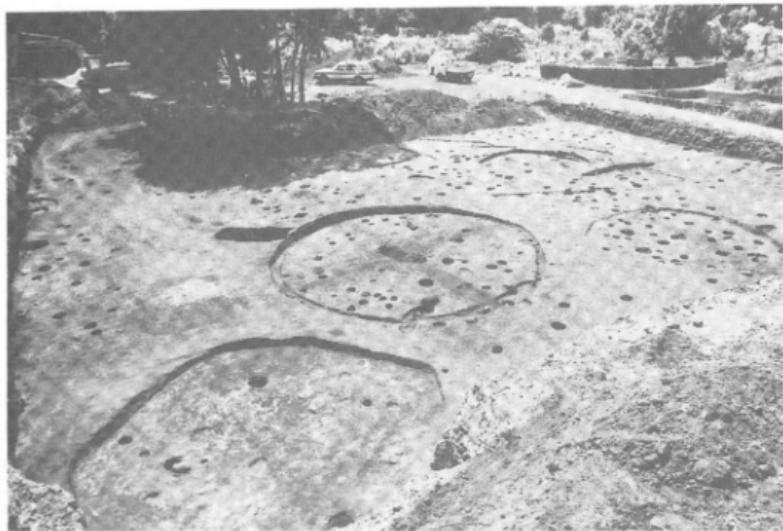
(ST 1・ST 2・ST 3・北西から)



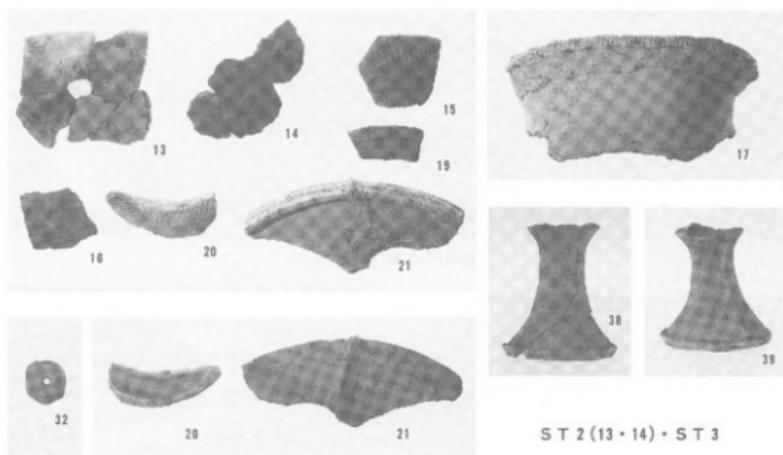
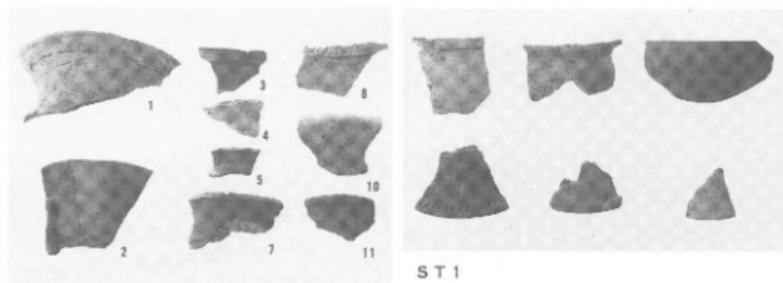
(ST 1・ST 2・ST 3・ST 4・西から)



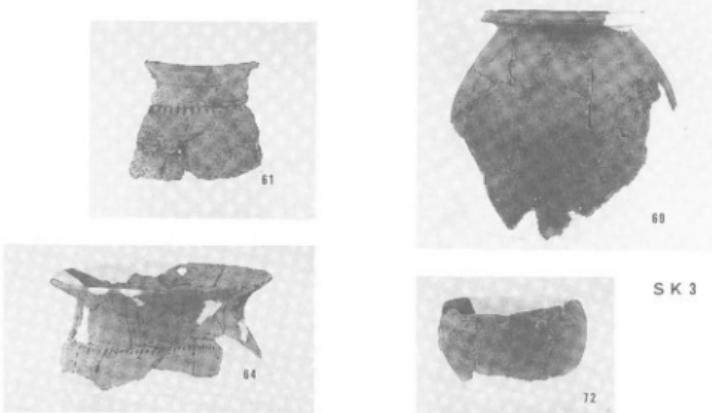
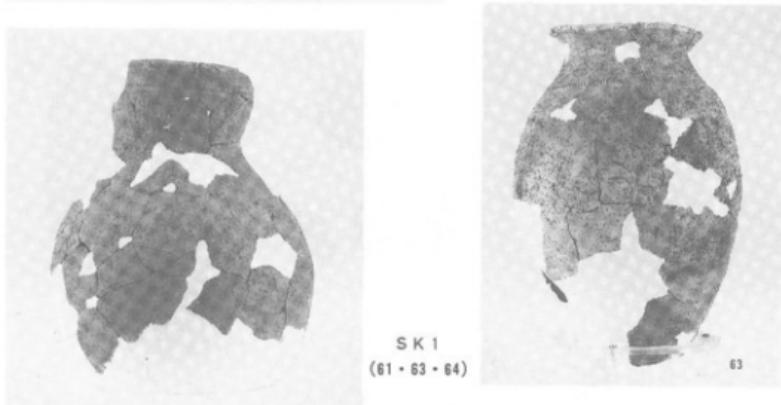
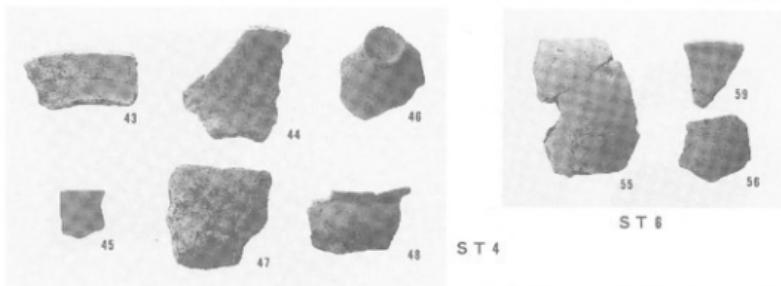
調査区近景(北から)



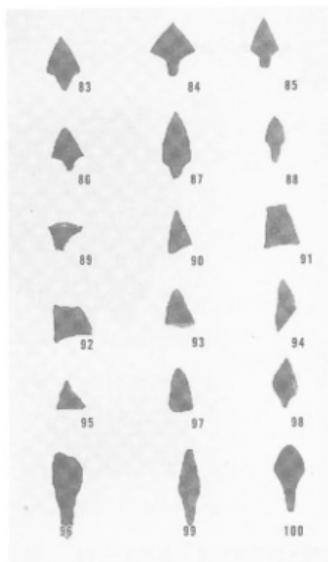
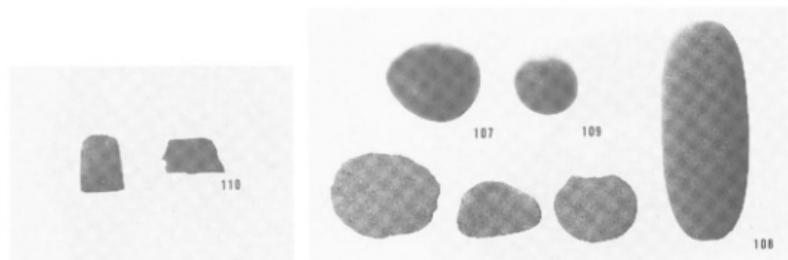
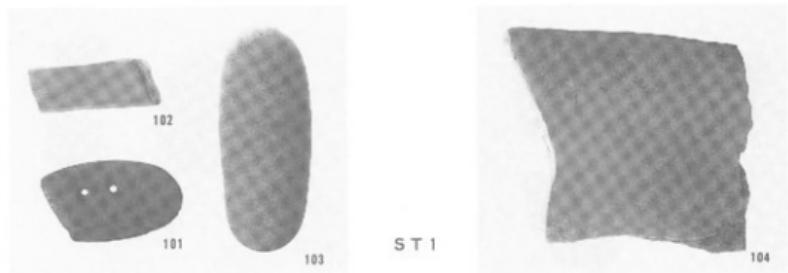
同上(北東から)



出土遺物(弥生土器・ST 1~3)



出土遺物(弥生土器・S T 4～6・S K 1～3)



出土遺物
(石器・S T 1~6・S K 1)

清 水 寺 岡 遺 跡

平成 2 年 3 月

編集・発行 安芸市教育委員会
印 刷 川北印刷株式会社